

マグリブ人によるメッカ巡礼記 *al-Rihlat*
の史料性格をめぐって

家 島 彦 一

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

On the Importance of the Maghribian Books
of Pilgrimage *al-Rihlāt*

YAJIMA, Hikoichi

Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa

はじめに

ムスリム社会におけるメッカ・メディナ巡礼 *hajj* は、単に彼らの宗教的義務を遂行する目的だけに留まらず、旅による自己鍛練、異文化・社会見聞、学問修得、学者・知識人との接触、有徳の聖者・指導者たちの聖地・墓廟参詣、同宗派・教団や同郷・同族出身者との交流、亡命移住、出稼ぎ、商売や情報収集などの多岐多様な目的と動機を内包していた¹⁾。

つまり、彼らは巡礼を機会に、国家や地縁・血縁社会などの狭い枠を出て、ウンマの一員としてイスラム世界全体のなかで広汎な文化的経済的活動を展開していたのである。

私は、巡礼機能のもつ、特にこれらの側面——イスラム世界の文化的経済的統合性と社会的流動性を形成する重要な要素として——

に注目している²⁾。

国家史や地域史、社会制度史あるいは観念的な社会経済史の枠組のなかでは、ともすればイスラム世界のもつ文化的経済的統合性や均等性の諸作用、また社会的流動性のダイナミズムに対する視角が見落されて、反面、イスラム社会・文化の多様性と地域性、対立・抗争・分離の諸側面だけが強調されがちである。しかし、われわれはイスラム世界をひとつの有機的に機能する統合体とみなして、その相互関連と結びつきの維持構造、つまり静態的構造の面からも、その歴史展開の諸過程を深く追究していく必要がある³⁾。

以上のような視角と研究課題を具体的問題のなかで明らかにするために、私は巡礼をめぐる社会経済的側面に注目し、その機能に見られる人的交流のネットワーク、物資の交換、教育・情報のコミュニケーションや技術伝播、

- 1) メッカ巡礼のもつ社会的経済的機能の多様性については、*Enc. Is., New Ed., III, "HĀDJĪJ"*, pp. 37-38 参照。
- 2) 「イスラム国家論研究会」主催によるシンポジウム「メッカ巡礼をめぐって」(1981年12月、東洋文庫で開催)のなかで、私は「メッカ巡礼をめぐる諸問題」と題して、巡礼機能のもつさまざまな側面について説明した。本稿は、その発表内容の一部を増補したものである。
- 3) この視角と研究課題にもとづいて、私は特にムスリム商業史を明らかにしようとしている。つまり、この場合の「商業」は単に商業理論にもとづいた売買行為、貨幣論や金融論また経済思想とその学説などの変遷過程を究明するのではなく、商行為を通じての人の移動とネットワークの形成、物資の交換、文化・情報、言語接触などの諸作用を起させる、総合的文化現象として捉える。

などの幅広いダイナミズムの諸相を捉えたい、と考えている。

私は、最近、数次に亘ってアラブ及びヨーロッパ諸国にある図書館、博物館、資料館やモスクなどに所蔵されている、メッカ・メディナ巡礼記——広くは旅行記 *al-Riḥlat (al-Riḥlat)*, またはヒジャーズ旅行記 *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya*, メッカ旅行記 *al-Riḥlat al-Makkīya* と呼ばれた——に関するアラビア語写本の総合的調査をすすめ、また校訂刊行本の出版状況の把握にも努めている⁴⁾。こうした巡礼記の調査の結果、イスラム世界のなかでも、特にアンダルス *al-Andalus* とマグリブ地方 *al-Maghrib*, において、巡礼記がほぼ12世紀後半以降、ひとつの重要な記録文芸のジャンルとして発展し、現在に至るまでほぼ同形式の記載法をもって数多く筆録され続けていることが明らかとなった。

本稿では、アンダルス・マグリブ地方において、巡礼記が何故に多く筆録・保存されてきたかを考え、またその叙述内容の特色、記録文芸としての巡礼記の発展過程、巡礼ルートと経由地、などの諸問題に言及することによって、マグリブ巡礼記の史料性格を捉えることに努めた。

私は、マグリブ巡礼記の性格分析と叙述内容の解明が、(1)イスラム世界におけるアンダルス・マグリブ地方の社会・文化と思考様式

の特殊性を認識するうえで、ひとつの重要なキメ手となること、(2)これらの叙述内容には、マグリブ地方のこののみならず、エジプト、シリア、ヒジャーズとイラクなどの諸地方の政情、経済と社会の諸状況をかなり詳細に伝えていること⁵⁾、の二点の大きな史料価値を認めることに通じると考えている。さらに、最初に指摘したように、ムスリム社会における巡礼をめぐる社会経済的側面を追究していくうえで、マグリブ巡礼記が数々の具体的事例を提供することは言うまでもない。

1. マグリブ巡礼記について

アラビア語の *riḥla, riḥlāt* は、広義には〈旅〉、〈旅程〉、または〈旅行記〉を意味するが、これがヒジャーズ巡礼記 *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya*, またはメッカ巡礼記 *al-Riḥlat al-Makkīya* とし、ひとつの重要な記録文芸のジャンルを形成し、特殊な発展を遂げたのは、アンダルス・マグリブ地方の学者・知識人^{ウラブ}たちの間においてであった。東方 *al-Mashriq* の諸地域^{マシュリク}でも、各時代に多くの旅行記 *al-Riḥlat, al-Riḥlat* が編述され、それらのなかにはメッカ巡礼記も含まれている⁶⁾。しかし、アンダルス・マグリブ地方の人びとによる *al-Riḥla* は、(1)旅行記 *al-Riḥla* は直ちにメッカ巡礼記 *al-Riḥlat al-Makkīya* を意味し、ほぼ共通の叙述形式をもって、12世紀後半以降、現在に至

4) 1970～71, 1974～75, 1977～78, 1979～80, の4回に亘り、エジプト、シリア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、スペイン、イギリスとフランスなどで、アンダルス・マグリブ人の巡礼記 *al-Riḥlat* の写本調査を行なった。

5) 例えば、13世紀末にメッカ巡礼を行なった Sabta (Ceuta) 生まれの人 al-Qāsim b. Yūsuf al-Tujibi によるメッカ巡礼記 *Mustafād al-Riḥla wa'l-Ightirāb* には、上エジプト地方の Qūs と紅海沿いの港市 'Aydḥāb とを結ぶキャラバン・ルートと停泊地に関する記事が含まれている。この記事のなかにはマムルーク朝側の同時代史料には全く見られない詳細で正確な情報が含まれている。この問題については、私は昭和56年度京都大学東洋史研究会大会において、「マムルーク朝時代のコース・アイザープ道——特に al-Tujibi の巡礼記に依る——」と題して発表し、マグリブ巡礼記の史料価値を高く評価した。

6) イスラム地理・旅行記の概観とその歴史については、'Ali Muḥsin 'Īsā, *Adab al-Riḥlat 'ind al-'Arab fī al-Mashriq*, Baghdad, 1978; Nicola Ziyadah, *al-Jughrāfiyūn wa'l-Riḥlat 'ind al-'Arab*, Beirut, 1962; Zaki Muḥammad Ḥasan, *al-Raḥḥālat al-Musulimūn fī al-Qurūn al-Wustā*, Cairo, 1945 などを参照。また、アンダルス・マグリブ人による地理・旅行記については、Husayn Mu'nis, *Ta'rikh al-Jughrāfiya wa'l-Jughrāfiyūn fī'l-Andalus*, Madrid, 1964 に概観されている。

るまで引き続いて筆録されてきたこと⁷⁾、(2) *al-Riḥla* の叙述内容は、メッカとの往復路の旅程で見聞・体験 ‘*iyān* した自然・地理・人間社会・習慣や歴史などの状況を記録することの他に、東方の諸地域、とくにエジプト、イラク、シリアなどの諸都市を高度に繁栄し発達した、イスラム諸学・教育と思想活動の中心地とみなして、そこでの学問探求の事情を詳しく報告することに最大限の力点が置かれている⁸⁾、の二点において大きな特徴もっている。

Ibn Khaldūn がその『歴史序説』*al-Muqaddima* のなかで、旅 *riḥla* の効用について説明し、「つまり、知識を探求して旅行することは、専門の学者たち *mashā’ikh* と出会い、諸々の人々と接触することによって、有益な知識を習得し完全なものとするうえで不可欠（な過程）である。」⁹⁾ と、指摘しているように、アンダルス・マグリブ地方の人びとにとって、旅＝巡礼旅行の最大の目的は東方の文明輝く諸都市を回って、学術・教育と思想な

どに関する最新の情報を多く集めること、つまり〈学問探求の旅〉*al-riḥlat al-‘ilmīya* を意味したのである¹⁰⁾。

そうした旅を通じて集収された知識と情報はすべて巡礼記 *al-Riḥla* のなかに記録されたのであって、従ってマグリブ人の巡礼記の叙述内容の中心が単なる地理・旅行記であるよりは、筆録者の学問探求を通じて得られた東方地域の学者・知識人たちの人名録 *tarjama*, *wafāyāt*, 法神学者・コーラン学者たちの類別 *ṭabaqāt*, 師弟間の学問伝統と教育の系譜 *isnād*, などの記録となったことは当然の結果であろう。

このように高名な学者知識人や聖者たちの *tarjama*, 弟子たちの *isnād* などを一定の記載順序で整理・集成した書籍は、元来、アンダルス・マグリブ地方では *barnāmaj* または *fihrist* と呼ばれた。Ibn al-Zubayr の *Ṣilat al-Sila* によると、すでに12世紀前半の頃から多くの種類の *barnāmaj* が編述されていたことが分かる¹¹⁾。記載形式とその内容の類似性から判

- 7) マグリブ人の *al-Riḥlat* のなかには、Tāsaft のマラブート al-Sidi Muḥammad al-Zarhūni, *Riḥlat al-Wafid fi Akhbār Hijrat al-Wālid* (Ed. & Trans., Justinard, Paris, 1940), Abu’l-Jamāl Muḥammad al-Fāsi, *al-Riḥlat al-Ibrizīyat ilā al-Diyār al-Injilīziyya* (Ed. Muḥammad al-Fāsi, Fās, 1967) や Ibn ‘Uthmān al-Maknāsī (1213/1798 没), *Riḥlat al-Badr li-Hadīyat al-Musāfir* のように、国家の外交使節として派遣された人による報告が含まれる。この場合の *al-Riḥlat* は報告書 *al-Risālat* と同意に用いられている。なお、Tāj al-Dīn al-Sarakhsi のように、東方地域の人でマグリブ地方に行き旅行記 *al-Riḥlat* を著わした事例は極めて少ない。al-Sarakhsi は、593/1196–97, Marrakesh を訪れてマグリブの各地を回り、*Riḥlat min al-Mashriq ilā al-Maghrib al-Aqsā* を筆録したと言われる (al-Makkari, *Nafh.*, II, pp. 68–76)。東方地域を訪問したアンダルス・マグリブ人については、*Nafh.*, I, pp. 463–943, マグリブ地域にきた東方地域の出身者については、*Nafh.*, II, pp. 2–103 参照。前者が後者より圧倒的に数が多かったことが判る。
- 8) 後述 p. 215 参照。
- 9) Ibn Khaldūn, *Kitāb al-‘Ibar.*, *al-Muqaddima*, p. 1045, Ed. ‘Abd al-Karim, Beirut, 1967.
- 10) *ibid.*, pp. 1044–45. アンダルス・マグリブ人の東方諸地域への旅行はメッカ巡礼より以上に学問修得を目的としていた。この点は、多くの巡礼記 *al-Riḥlat* の記載内容からも、また Ibn Zubayr, *Ṣilat al-Ṣilat.*, Ibn Bashkuwal, *Kitāb al-Ṣilat.*, Ibn al-‘Abbār, *al-Takmilat.*, al-Maqqari, *Nafh.*, Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāta* などに記された高名なマグリブ知識人たちの略伝を通じて明らかとなる。Dominique Urvoy, *Le Monde des Ulémas Andalous du V/XI^e au VII/XIII^e Siècle*, pp. 71–82, Genève, 1978 参照。
- 11) Ibn al-Zubayr, *Ṣilat al-Sila* は30種の *barnāmaj* と2種の *fahrasat* を引用している。そのなかで、‘Abd al-Haqq b. Ghālīb の *barnāmaj* について、“‘Abd al-Haqq は一つの *barnāmaj* を著わした。そのなかで、彼の ra’y の見解 *marwiyāt* と著名な先生たち *shuyūkh* の名を示している。” (Repr. Maktabat Khayyāt, Beirut, p. 3) と説明した。また、al-‘Abdari は、その *Riḥlat al-‘Abdari* のなかで、13人の著者による *barnāmaj* を説明している。例えば、Tunis の知識人の一人でハディース学者 Abū Ja‘far Aḥmad al-Fihri を説明して、彼が東方地域の旅に出て、巡礼の義務を遂げたこと、Alexandria, Miṣr, シリアやヒジャーズで高名な聖賢 *imām* たちと面識を得た。彼には大小2種の *barnāmaj* があって、彼の著書と先生達 *shuyūkh* の名を述べている、とある (*al-Riḥlat al-Maghribīya.*, p. 43, Ed. Muḥammad al-Fāsi, Rabat, 1968)。併せて、al-Maqqari, *Nafh.*, I, pp. 809, 818. 参照。

断して、明らかにマグリブ巡礼記 *al-Riḥla* は、*barnāmaj* または *fihrist* の一類型として発達してきたもの、と考えられる¹²⁾。つまり、〈メッカ巡礼の旅 *riḥla* を通じて習得し集収された、東方の学問・教育と知識人たちに関する *barnāmaj*〉という意味で、12世紀半ば頃より、特に *al-Riḥla* の名称が付されたのである。

巡礼記 *al-Riḥla* ジャンルの記録文芸が生まれた背景として、*al-Riḥla* の祖型とも言うべき *barnāmaj*, *fihrist* との関り方、巡礼 *ḥajj* に対するアンダルス・マグリブ社会の対応、東方との交通運輸の状況、東方地域の都市文明に対する見方、マグリブ社会・経済の変容、郷土意識 *waṭan* の形成過程、マグリブ人の東方地域及びサハラ南縁方面への移住問題、などの多方面に亘る総合的情况分析と理解が必要と思われる。これらの諸問題を考えるにあたって、まず19世紀末までに記録・編述された、アンダルス・マグリブ人による巡礼記 *al-Riḥla* を列挙してみたい。これらの書目中には、以下に挙げる典拠文献のみに収録されていて、私が実際にその写本の所在と記載内容を確認していないものも多くある。ここでは、出来る限り時代別にすべての巡礼記 *al-Riḥla* を網羅することに努めた。また、写本の所蔵場所・番号などは、煩雑になるので省き、典拠とした文献のみを挙げた。校訂・刊行本があれば記した¹³⁾。

略号および典拠の文献資料は、以下の通りである。b. = 生年；h. = 巡礼出発の年号；d. = 没年；w. = 巡礼記著述年；H. = Hijra；Ed. = Edition；*al-Iḥāṭa*. = Ibn Lisān al-Dīn Ibn al-Khaṭīb: *al-Iḥāṭat fī Akhbār Gharnāṭa*, Ed. Muḥammad ‘Abd Allāh ‘Inān, 2 vols.,

Cairo, 1973-4；*Nafh*. = al-Makkarī, *Kitāb Nafh al-Ṭīb min Ghuṣn al-Andalus al-Raḥīb*, Ed. R. Dozy, G. Dugat, etc., 2 vols., Leiden, 1855-61 (Repr., 1967)；*al-Durar* = Ibn Ḥajar al-Asqallānī, *al-Durar al-Kāmina fī A’yān al-Mi’at al-Thāmina*, Ed. Muḥammad Sayyid, 5 vols., Cairo, 1970-1；*Kashf*. = Ḥajjī Khalīfa, *Kitāb Kashf al-Zunūn ‘an Asmā’ al-Kutub wa’l-Funūn*, 2 vols., Istanbul, 1941；*Zayl*. = *Zayl Kashf al-Zunūn*, 2 vols., Istanbul, 1945；*Dalīl*. = ‘Abd al-Salām b. ‘Abd al-Qādir, *Dalīl Mu’arrikh al-Maghrib al-Aqṣā*, 2 vols., Casablanca, 1960-65；*Tāj*. = al-Ḥasan al-Sā’ih, *Tāj al-Mafraq fī Taḥliyat ‘Ulamā’ al-Mashriq, Muqaddimat li’l-Kitāb*, Fās, 1970；*G.A.L.* = C. Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Litteratur*, 2 vols., Leiden, 1943-49；*G.A.L.S* = C. Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Litteratur, Dritter Supplementband*, 3 vols., Leiden, 1937-42；*E. Is.* = *Encyclopaedia of Islam*, New Ed.

1. Ibn al-‘Arabī, Abū Bakr Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Ma‘āfirī al-Ishbīlī (h. 485/1092-3, d. 543/1148-9)：*Riḥlat Ibn al-‘Arabī*. Muḥammad al-Manūnī (Rabat) がこの *al-Riḥla* 写本を私蔵していると言われる。Iḥsān ‘Abbās により、その一部が校訂・紹介された (*Majallat al-Abḥāth.*, Beirut, 1968, no. 21)。Ibn Jubayr の *Riḥlat* に先行する最初の *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya* と言えよう¹⁴⁾。Ibn Khaldūn は、その『歴史序説』*al-Muqaddima* のなかで、Ibn al-‘Arabī の *al-Riḥla* を一部引用し、マグリブにおける教育

12) *al-Riḥlat* と *barnāmaj*, *fihrist* との関係については、al-Ahwānī, “Kutub Barnāmaj al-‘Ulamā’ fī al-Andalus”, *Majallat Ma‘had al-Makhtūṭāt al-‘Arabīya*, I, 1955；*Riḥlat al-Qalṣādī*, Ed. Muḥammad Abū al-Affān, Intro., pp. 68-69；Ansāri al-Raṣṣā‘ al-Tūnisi, *Fahrasat al-Raṣṣā‘*, Ed. Muḥammad al-‘Annābi, Intro., Tunis, 1967 及び *Enc. Is.*, II, p. 96, “AL-‘ABDARĪ” 参照。

13) アンダルス・マグリブ人によるメッカ巡礼記については、‘Abd al-Ḥayy al-Kattānī, *Dalīl al-Ḥajj wa’l-Siyāḥa*, Rabat, 1935 にその総書目が掲載されていると言われるが、私はこの書を未見である。*Riḥlat al-Qalṣādī*, pp. 60, 64 参照。

14) cf. *Riḥlat al-Qalṣādī*, Intro., pp. 60-61.

論および学問教育の方法を説明している¹⁵⁾。
al-Maqqarīによれば、Ibn al-‘Arabīは617/
1220–21, Alexandriaで死去した¹⁶⁾。

2. Ibn Jubayr, Abu’ l-Ḥusayn Muḥammad b. Jubayr al-Kinānī (b. 540/1145, h. 578/1183, d. 614/1217): *Riḥlat Ibn Jubayr = Tadhkirat bi’l-Akhhbār ‘an Ittifāqāt al-Asfār. Kashf.*, I, 836 には *Riḥlat al-Kattānī* とあるが、おそらく *Riḥlat al-Kinānī* の誤り。*al-Iḥāṭa.*, II, 231; *Nafh.*, I, 185, 536, 714, II, 200; *Dalīl.*, II, 338; Ed. W. Wright, Leiden-London, 1907; Ed. H. Nassār, Cairo, 1374; Ed. Dār al-Ṣādir, Beirut, 1959; *G.A.L.*, I, 478; *G.A.L.S.*, I, 879.

3. Ibn Sa‘īd al-Maghribī, Abu’ l-Ḥasan ‘Alī b. Mūsā (b. 610/1213, h. 639/1241, 666/1267, d. 685/1286): *Riḥlat Ibn Sa‘īd = al-Nafḥat al-Miskīya fī al-Riḥlat al-Makkīya. Nafh.*, I, 642; *E. Is.*, III, 926.

4. Ibn Rushyad, Abū ‘Abd Allāh b. Rushayd Muḥammad b. ‘Umar al-Sabtī al-Fihri (b. 657/1259, h. 683/1284, d. 721/1321): *Riḥlat Ibn al-Rushayd = Mala’ al-Ghayba fī-mā jumī’a bi-Ṭūl al-Ghayba fī al-Wajhatayn al-Karīmatayn ilā Makka wa Tayyba. al-Iḥāṭa.*, II, 462; *Nafh.*, I, 399, II, 352; *Kashf.*, I, 836. *Zayl.*, I, 550 では、その書名を *al-Riḥla ilā Makka wa Tayyba* とする。*Dalīl.*, II, 363–4; *E. Is.*, III, 909. 現在、Muḥammad al-Ḥabīb Balkhūja (Tunis)によって、その校訂作業が進められている¹⁷⁾。

5. al-Qāsim b. Yūsuf al-Tujībī al-Sabtī (b. circa 670/1271–2, h. 696/1296, d. circa 730/1329–30): *Riḥlat al-Tujībī = Mustafād al-Riḥla wa’l-Ightirāb. Nafh.*, I, 398; *al-Durar.*, III, 324–25; *Dalīl.*, II, 341;

Ed. ‘Abd al-Ḥafīz Maṣṣūr, Tunis-Libya, 1975¹⁸⁾。

6. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad al-‘Abdarī al-Ḥayḥī (h. 688/1289): *Riḥlat al-‘Abdarī = al-Riḥlat al-Maghribīya*. Ed. Muḥammad al-Fāsī, Rabat, 1968; *Dalīl.*, II, 340; *G.A.L.*, I, 482; *G.A.L.S.*, I, 883; *E. Is.*, I, 96.

7. Abū Muḥammad ‘Abd Allāh b. Muḥammad b. Aḥmad al-Tijānī (b. circa 670/1272 or 675/1276, h. 706/1306): *Riḥlat al-Tijānī*. Ed. Ḥasan Ḥusnī ‘Abd al-Wahhāb, Tunis, 1958; *Nafh.*, II, 504; *G.A.L.*, II, 257; *G.A.L.S.*, II, 368.

8. Ibn Baṭṭūṭa, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. ‘Abd Allāh b. Baṭṭūṭa (b. 703/1304, h. 725/1325, d. 770/1368 or 779/1377, w. 756/1357): *Riḥlat Ibn Baṭṭūṭa = Tuḥfat al-Nuzzār wa Gharā’ib al-Amṣār wa ‘Ajā’ib al-Asfār. al-Iḥāṭa.*, I, 97; *al-Durar.*, IV, 100; *Dalīl.*, II, 336–8; Ed & Trans. C. Defrémery and B. R. Sanguinetti, Paris, 1853–9, 4 vols.; Trans. H. A. R. Gibb, *The Travels of Ibn Battuta*, Cambridge [Hakluyt Society], 1958–71, 3 vols., in progress; *E. Is.*, III, 735–6.

9. Abu’ l-Baqā’ Khālid b. ‘Isā al-Balawī al-Andalusī (b. 713/1313, h. 736/1336–740/1340, d. circa 765/1363–4): *Riḥlat al-Balawī = Tāj al-Mafraq fī Taḥliyat ‘Ulamā’ al-Mashriq. al-Iḥāṭa.*, I, 500–02; *G.A.L.S.*, II, 379. al Ḥasan al-Sā’ih は、この書の校訂を完成し、現在その序文説明のみを出版した (*Tāj al-Mafraq fī Taḥliyat ‘Ulamā’ al-Mashriq, Muqaddimat li’l-Kitāb*, Fās, 1970)。

10. al-Ra‘īnī, Abū ‘Abd Allāh Muḥa-

15) Ibn Khaldūn, *al-Muqqadimat.*, p. 1041.

16) al-Maqqarī, *Nafh.*, I, pp. 616, 891.

17) *Riḥlat al-Qalṣādī*, Intro., p. 64 (n. 173).

18) *op. cit.*, n. 5 参照。

mmad b. Sa'īd al-Ra'īnī al-Sarrāj (circa H. 8 mid.): *Riḥlat al-Ra'īnī. Dalīl.*, II, 341.

11. Ibn Qunfudh, Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Ḥasan b. al-Khaṭīb Ibn Qunfudh al-Qusumṭīnī (b. 770/1368, d. 810/1407): *Riḥlat al-'Abbās=Uns al-Faqīr wa 'Izz al-Ḥaqīr*. Ed. Muḥammad al-Fāsī, Rabat, 1965; *Dalīl.*, I, 181; *G. A. L.*, II, 241.

12. Ibn al-Ṣalāḥ Zawrī, Taqī al-Dīn Abū 'Amr 'Uthmān b. 'Abd al-Rahmān (d. 843/1439-40): *Riḥlat Ibn al-Ṣalāḥ. Kashf.*, I, 836.

13. Aḥmad b. Muḥammad b. Dā'ūd b. Ya'qūb al-Jazūlī al-Hashtūkī (d. 863/1458-59): *Riḥlat Aḥmad al-Hashtūkī=Hidāyat al-Malik al-'Allām ilā Bayt Allāh al-Ḥaram. Dalīl.*, II, 341, 370; *Kashf.*, I, 835.

14. Abu'l-Ḥasan 'Alī al-Qalṣādī (Qalāṣādī) al-Andalusī (h. 840/1436-55/1451; d. 891/1486): *Riḥlat al-Qalṣādī. Zayl.*, I, 551 は、その著者を Nūr al-Dīn 'Alī b. Muḥammad al-Andalusī とする。Ed. Muḥammad Abū al-Ajḫān, Tunis, 1978; *G.A.L.*, II, 266; *S.*, II, 379.

15. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Aḥmad Zarūq al-Fāsī (circa H. 9 lat.): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya=Riḥlat Zarūq. Dalīl.*, II, 342.

16. Abu'l-'Abbās Muḥammad al-Qusumṭīnī Qunfudh (d. Damas, 1001/1592): *Riḥlat Qunfudh=Idrīsīyāt al-Nasab fi'l-Qurā wa'l-Amṣār wa Bilād al-'Arab. G.L.A.*, II, 464; *S.*, II, 711.

17. Abu'l-'Abbās Aḥmad Āfghāy al-Andalusī (b. 1007/1598): *Riḥlat al-Shabāb ilā Liqā' al-Aḥbāb. Zayl.*, I, 550; *Dalīl.*, II, 343.

18. Aḥmad b. 'Abd Allāh b. Abī Maḥālī al-Sijilmāsī (d. 1023/1614 or 1031/1622): *Riḥlat Aḥmad b. 'Abd Allāh=al-Isḫāt al-Kharūt fī Qaṭ' Bul'um al-'Ifrit al-Nifrit. Dalīl.*, II, 368; *G.A.L.*, II, 464.

19. Muḥammad b. 'Abd al-Mu'tī b. 'Abd al-Faṭḥ b. Aḥmad b. 'Abd al-Ghanī b. 'Alī al-Ishāqī al-Manūfī (w. 1033/1623): *al-Riḥlat al-Mubārakat. G.A.L.S.*, II, 407.

20. Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad al-Qaysī al-Sarrāj Ibn Mulīḥ (h. 1040/1630): *Anīs al-Sārī wa'l-Shārib min Aqṭār al-Maghārib ilā Muntahā al-Āmāl wa'l-Ma'ārib wa Sayyid al-A'ājim wa'l-A'ārib. Dalīl.*, II, 334-5; Ed. Muḥammad al-Fāsī, Fās, 1968.

21. al-'Ayyāshī, Abū Sālim 'Abd Allāh b. Muḥammad b. Abī Bakr al-'Ayyāshī (b. 1037/1628, h. 1059/1649, 1064/1653-4, d. 1090/1679): *Riḥlat al-'Ayyāshī=Mā' al-Mawā'id. Dalīl.*, II, 362; Ed. Fās, 1316/1898, 2 vols.; *G.A.L.*, II, 464; *S.*, II, 711; *E. Is.*, I, 795.

22. Mūlāy al-Sharīf al-Walātī, Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Abd Allāh (d. 1101/1689): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 343-44.

23. Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Alī b. Muḥammad b. Aḥmad al-Rāfi'ī al-Andalusī al-Taṭwānī (b. 1040/1630, h. 1096/1688, d. 1097/1689): *al-Ma'ārij al-Rāqiya fi'l-Riḥlat al-Mashriqiya. Dalīl.*, II, 366.

24. Abū 'Alī al-Ḥasan b. Mas'ūd al-Yūsī al-Marrakishī (b. 1040/1630, h. 1101/1690, d. 1102/1691): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya=Riḥlat al-Yūsī=Kitāb al-Muḥāḍarat. Dalīl.*, II, 344; *G.A.L.S.*, II, 675-76.

25. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. Dā'ūd al-Hashtūkī (h. 1119/1707): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 345.

26. Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Abd al-Wahhāb al-Wazīr al-Ghassānī (d. 1119/1707): *Riḥlat. Dalīl.*, II, 344; *Zayl.*, II, 552.

27. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. Nāṣir al-Dar'ī (d. 1129/1717): *al-Riḥlat al-Nāṣiriya*. *Zayl.*, II, 551 では、*Riḥlat al-Mashriq* とある。 *Dalīl.*, II, 344-5; *G.A.L.S.*, II, 464; *S.*, II, 711.

28. Abū Muḥammad 'Abd al-Wāḥid b. al-Ḥasan al-Ṣanhājī (d. 1135/1722): *Riḥlat*. *Dalīl.*, II, 345.

29. Abu'l-'Abbās al-Sūsī al-Bayūrki al-Isghriksī (d. 1136/1723): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 345.

30. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Abī 'Asīra al-Fāsī al-Fihri (d. 1157/1743): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 345-46.

31. Abu'l-'Abbās Aḥmad Ṣāliḥ b. Ibrāhīm al-Darāwī al-Dar'ī (d. 1140/1727 or 1144/1731): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya = al-Riḥlat al-Shāfiya*. *Dalīl.*, II, 346-7.

32. 'Abd al-Raḥmān b. Abī'l-Qāsim al-Mazmazī al-Shāwī (d. 1141/1728-29): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya = Riḥlat al-Qāsidīn wa Raghat al-Zā'irīn*.

33. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad al-Sūsī al-'Abbāsī (d. 1149/1736): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 347.

34. Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Abd al-Salām Banānī (Bannānī) (h. 1141/1728): *al-Riḥlat al-Banāniya*. *Dalīl.*, II, 348.

35. Abū Mudīn 'Abd Allāh b. Aḥmad al-Rūdānī al-Dar'ī (d. 1157/1743): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 347.

36. 'Abd al-Raḥmān b. Muḥammad b. Kharrūb al-Majjājī (w. 1163/1743): *Riḥlat al-Majjājī*. *G.A.L.S.*, II, 465.

37. Abū Muḥammad 'Abd al-Mujīd b. 'Alī al-Zayyādī (al-Zabādī) al-Manālī (d. 1163/1750): *Riḥlat al-Zayyādī al-Khaṭikī = Bulūgh al-Maram bi'l-Riḥlat ilā Bayt Allāh al-Ḥarām*. *Dalīl.*, II, 335; *G.A.L.S.*, II, 676.

38. Shams al-Dīn Muḥammad b. al-Ṭayyib b. 'Abd al-Faṭḥ Muḥammad b.

Muḥammad b. Mūsā al-Fāsī al-Madanī al-Sharāghī (b. Fās, 1110/1698, h. 1170/1756): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya*. *G.A.L.S.*, II, 522-23.

39. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. 'Abd al-'Azīz al-Hilālī (d. 1174/1761): *Riḥlat Aḥmad al-Hilālī*. *Dalīl.*, II, 348. *Zayl.*, I, 551 では、*al-Riḥlat al-Makkīya* とある。

40. al-Ḥusayn b. Muḥammad al-Warthilānī (b. 1125/1713, h. 1179/1765, d. 1193/1779): *al-Riḥlat al-Warthilāniya = Nuḥḥat al-Anḣār fī Faḍl 'Ilm al-Ta'rīkh wa'l-Akḥbār*. Ed. Muḥammad b. Abī Shanb, Alger, 1908 (Repr., Beirut, 1974); *G.A.L.S.*, II, 713.

41. Abū 'Abd Allāh Muḥammad al-Ṭāhir b. 'Alī al-Salām al-Salāwī (h. 1179/1765): *Riḥlat al-Salāwī*. *Dalīl.*, II, 348.

42. Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad b. 'Abd Allāh al-Ḥaḍiki (d. circa. 1170-80/1756-1767): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 348-9.

43. Abu'l-'Abbās Aḥmad 'Abd Allāh al-Qāsim al-Sūsī al-Karsīfī (d. 1180/1766): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 348.

44. Abū Ishāq Ibrāhīm al-Sūsī al-'Aynī (d. 1199/1784): *Riḥlat Ḥijāzīya*. *Dalīl.*, II, 349.

45. Aḥmad b. Sīdī 'Ammār al-Jazā'irī (h. 1172/1758): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya*. *G.A.L.S.*, II, 689. *Zayl.*, I, 550 にある *al-Riḥlat al-Jazā'iriya* に同じか。

46. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. Aḥmad b. Muḥammad b. 'Abd al-Qādir al-Fāsī al-Fihri (h. 1211/1796-7, d. 1214/1799): *Riḥlat al-Fāsī*. Ms. Alexandria al-Baladiya; *Dalīl.*, II, 349.

47. al-Fulānī al-'Umarī, Ṣāliḥ b. Muḥammad b. Nūh b. 'Abd Allāh b. 'Umar (b. 1166/1753, h. 1187/1773, d. 1218/1803): *Riḥlat al-'Umarī al-Fulānī*. *G.A.L.S.*,

II, 523.

48. Muḥammad b. ‘Abd al-Salām al-Nāṣirī al-Dar‘ī (h. 1196/1781, h. 1211/1797, d. 1239/1823-24): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīyāt al-Kubrā. Dalīl.*, II, 349-50.

49. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad Abu’l-Qāsim b. Aḥmad al-Zayyānī (b. 1147/1734, d. 1249/1833): *al-Tarjmānat al-Kubrā fī Akhbār al-Ma‘mūr Barran wa Baḥran. Dalīl.*, II, 338, 350; Ed. ‘Abd al-Karīm al-Faylānī, Rabat, 1967.

50. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad Būra’s al-Mu’skarī (h. 1218/1803): *Riḥlatī wa Niḥlatī fī Ta’dād Riḥlatī. Dalīl.*, II, 349.

51. Abū Muḥammad ‘Abd al-Qādir b. Aḥmad al-Kūhin (d. 1254/1838): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 351.

52. Aḥmad b. Ṭuwayr al-Janna b. ‘Abd Allāh (b. circa 1202/1787, h. 1245/1829, d. 1256/1848): *Riḥlat Aḥmad*. Ed. & Trans. H. T. Norris, *The Pilgrimage of Ahmad, Son of the Little Bird of Paradise, An Account of a 19th Century Pilgrimage from Mauritania to Mecca*, Warminster, 1977.

53. Abu’l-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī b. Muḥammad Dīnīyat al-Ribāṭī (h. 1267/1850): *Riḥlat. Dalīl.*, II, 351.

54. Abū ‘Īsā al-Mahdī b. al-Ṭālib b. Sūda (h. 1269/1852): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 351.

55. Abū Ḥafṣ Ḥamdūn b. ‘Abd al-Raḥmān b. al-Salamī (d. 1276/1859): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 349.

56. Abu’l-‘Alā’ Idrīs b. ‘Abd al-Hādī al-‘Alawī al-Shākīrī al-Ḥusnī (h. 1288/1871): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 355-56.

57. Muḥammad al-Sanūsī (b. 1167/1851, h. 1299/1882, d. 1318/1900, w. 1300-03/1883-86): *al-Riḥlat al-Ḥijāzīya*. Ed. ‘Alī al-Shanūfī, vol. 1, Tunis, 1976.

58. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad Sa‘īd al-Sharīf al-Kathīrī al-Sūsī al-Hashtūkī (d. H. 13 lat.): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 351-2.

59. Anonymous al-Sūsī (d. H. 13 lat.): *Riḥlat Ḥijāzīya. Dalīl.*, II, 352.

60. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad al-Sūsī al-Yazīdī (d. 1309/1891): *Riḥlat Ḥijāzīya Ṣaghīra. Dalīl.*, II, 352.

61. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Muḥammad al-Gharbāwī (d. 1309/1891): *Riḥlat. Dalīl.*, II, 354.

62. Abu’l-Faḍl al-Fāṭimī b. al-Ḥusayn al-Siqillī al-Ḥusaynī (h. 1310/1892): *Riḥlat. Dalīl.*, II, 353.

63. Abū ‘Alī al-Ḥasan b. Muḥammad al-Ghassāl (h. 1315/1827): *al-Riḥlat al-Tanjawīyat al-Mamzūjat bi’l-Manāsik al-Mālikīya. Dalīl.*, II, 357.

64. Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Abī Bakr b. Kīrān (d. 1314/1896): *al-Riḥlat al-Fāsīyat al-Mamzūjat bi’l-Manāsik al-Mālikīya. Dalīl.*, II, 354; Ed. Fās¹⁹⁾.

2. 巡礼記 *al-Riḥla* の時代分類

以上のように、19世紀以前に記録・編述されたマグリブ人による巡礼記 *al-Riḥla* は64種に及び、ここでは省略したがそれらの要約本も多くの種類が筆録されている²⁰⁾。また、‘Abd al-Salām は、1900年以降の巡礼記として10種余りを挙げている²¹⁾。

以上の64種の巡礼記とその筆録者を時代別に見ると、おおよそ次の6期に分類することが出来る。

[I] 12世紀半ば～後半：Ibn al-‘Arabī, Ibn Jubayr.

[II] 13世紀後半～14世紀半ば：Ibn Sa‘īd, Ibn Rushayd, al-Qāsim al-Tujībī, al-‘Abdarī, al-Tijānī, Ibn Baṭṭūṭa, al-Balawī, al-Ra‘īnī.

[III] 15世紀前半～半ば：Ibn Qunfudh,

Ibn al-Ṣalāḥ, al-Jazūlī, al-Qalṣādī.

[IV] 16世紀末～17世紀前半: ‘Alī al-Qusumṭīnī (al-Qusanṭīnī), Aḥmad Āfghāy, Aḥmad al-Sijilmāsi, Aḥmad al-Qaysī.

[V] 17世紀後半～18世紀前半: al-‘Ayyāshī, al-Walātī, al-Yūsī, al-Fāsī al-Mudnī, Ibn Dā’ūd, al-Nāṣir, al-Ṣanhājī, Aḥmad al-Fāsī, Ibrāhīm al-Darāwī, al-Mazmazī, Muḥammad al-Sūsī, Muḥammad Bannānī, al-Majjājī, al-Zayyādī, al-Hilālī.

[VI] 18世紀後半～19世紀末: al-Warthīlānī, al-Salāwī, al-‘Aynī, al-Jazā’irī, al-Fāsī al-Fihri, al-Fulānī, al-Nāṣiri, Aḥmad b. Ṭuwayr, al-Ribāṭī.

言うまでもないことであるが、ひとつの巡礼記 *al-Riḥla* が記録・編述されて、後世に残されるためには、巡礼体験者、記録・筆録者と巡礼記に対する学者・知識層の関心、など

の諸要素によって決定されるが、より具体的に説明するならば、(1)メッカ・メディナに通じる巡礼旅行の情況、(2)アンダルス・マグリブ社会における巡礼 *hajj* の果たす宗教的社会的役割、(3)マグリブ知識層による東方地域の学者、諸学、教育及び思想への好奇心、などの情況変化に大きく影響される。

巡礼熱が高まり、しかも東方地域と結ばれた交通運輸のルート、経由地と旅の安全が保障されて、多くのマグリブ人たちが巡礼の義務を遂行 *ada’ farīdat al-hajj* すれば、巡礼体験者たちが巡礼書を筆録する。また、それとは反対の情況のなかでも、即ち軍事政治的経済的情勢の変化にともなって、ルートの寸断と旅の危険により、巡礼が困難になれば、巡礼遂行への待望と東方地域におけるイスラム学問と教育の習得を渴望して、過去の著明な巡礼記に典拠を求めて、筆写・再録したり、

- 19) メッカ巡礼記 *al-Riḥlat al-Hijāziya* であるかは不詳だが、*al-Riḥlat* と題したマグリブ人による著述書目を挙げれば、次の通りである。
Ibn Khaldūn: *Riḥlat Ibn Khaldūn (Kashf)*, I, 835). Abū al-Qāsim al-Tujībī Aḥmad b. Sulaymān b. Khalaf al-Būjī al-Andalusī (d. 493/1099–1100): *Riḥlat Abī’l-Qāsim al-Tujībī (Kashf)*, I, 836; *Zayl.*, I, 550). Ibrāhīm b. Khalaf b. Muḥammad Farqad al-Qurashī (b. 484/1091–92, d. 572/1176–77): *al-Riḥlat al-‘Anwīya (al-Iḥāṭa.)*, I, 369; *Zayl.*, I, 551). Muḥammad b. Muḥammad b. Aḥmad b. Abī Bakr b. Yahyā al-Qurashī al-Maqqari al-Tulamsāni (Andalus, 756/1355, d. 759/1358): *Riḥlat al-Mutabattil (al-Iḥāṭa.)*, II, 203; *Naḥḥ.*, I, 503; *Zayl.*, I, 551). Ibn Fāṭima: *Riḥlat Ibn Fāṭima* (Mu’nis Ḥusayn, *Riḥlat al-Andalus*, 45). Abū Muḥammad ‘Abd al-Qādir al-Jilāni al-Ishāqī (d. 1171/1757): *Riḥlat Abī Muḥammad (Dalil.)*, II, 347–8). Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. al-Tihāmi b. ‘Amr al-Ribāṭī: *Riḥlat (Dalil.)*, II, 350). Abū Hāmid al-‘Arabī b. Muḥammad al-Damnāti (h. 1244/1828): *Riḥlat (Dalil.)*, II, 350). Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. al-Ḥasan al-Sabū (h. 1310/1892): *Riḥlat (Dalil.)*, II, 353). また、al-Ḥasan al-Sā’ih が挙げる *al-Riḥlat* の中で、典拠不明のものには、次の *al-Riḥlat* がある。*Riḥlat al-‘Allāmat al-Rudāni. Riḥlat Muḥammad al-Sā’ih = al-Riḥlat al-Hijāziya. Riḥlat al-Hawāli = al-Riḥlat al-Hijāziya. Riḥlat al-Muqri* (1591–1632). *Riḥlat Aḥmad al-Aqādīri = Nasamat al-‘As fi Hijrat Sayyid-nā Abī al-‘Abbās* (d. 1721). その他、1900年以降の *al-Riḥla* については *Dalil.*, II, 354–70 参照 (後述、注 n. 21)。これらのなかで、Ibn Khaldūn の巡礼記はその自伝 *al-Ta’rif bi Ḥayāt Ibn Khaldūn wa Riḥlat-hi Gharban wa Sharqan* の中に纏められていると言われるが (Ed. Muḥammad b. Tāwayt al-Tanji, Cairo, 1951), この書は未見である。cf. *Adab al-Riḥlāt.*, pp. 238–58.
- 20) *Dalil.*, II, pp. 349–57.
- 21) *ibid.*, II, pp. 334, 354, 358–361. 1900年以降に著わされた主な巡礼記として、Abū ‘Abd Allāh al-Kattāni, *al-Riḥlat al-Hijāziya*; Abū’l-‘Abbās Aḥmad al-‘Ayyāshī, *Riḥlat Hijāziya*; Abū’l-‘Abbās Aḥmad al-Rahunī, *al-Riḥlat al-Malikīya*; ‘Abd al-Qādir b. Muḥammad, *al-Riḥlat al-Kubrā fi Akhbār Hādihā al-‘Ālam Baran wa Baḥran*; Abū’l-‘Alā’ Idrīs b. Muḥammad al-Ju’aydi, *al-Riḥlat al-Hijāziya*; Abū ‘Abd Allāh Muḥammad, *al-Riḥlat al-Mu’iniya al-Muḥarrara ilā Makka wa’l-Madīnat al-Mumawwara*; Abū ‘Abd Allāh Muḥammad al-Mahdī al-Kattāni, *al-Riḥlat al-Hijāziya*; Abū Zayd ‘Abd al-Raḥmān al-‘Alawī; *Riḥlat li’l-Hijāz wa Miṣr wa’l-Shām*; Abū ‘Abd Allāh al-Tūnisi, *Riḥlat Abī ‘Abd Allāh al-Tūnisi*; Abū al-‘Alā’ Idrīs, *Riḥlat Hijāziya* がある。

要約書を編述することも多かった。

先きにも言及したように、*barnāmaj*、または *fihrist* と呼ばれる、名士・学者達 *shuyūkh*, *mashā'ikh* の名籍録の発展形式として、[1]の時期に始めて巡礼記 *al-Riḥla* 形式の記録文芸が生まれ、編述された²²⁾。では、*barnāmaj* が巡礼記 *al-Riḥla* として、新しいジャンルを形成するに至った事情を何に求めるべきであろうか。

まず、12世紀後半までの、マグリブ地方の社会的経済的情况との関りにおいて、この問題を検討してみたい。

Ibn Jubayr が巡礼旅行を行なった12世紀後半までの時期は、マグリブ地方と東方の諸地域との間の人的コミュニケーション、物資の交換と情報・知識の伝達関係には、概して大きな障害と隔たりはなく、自由な幅広い交流と融合の諸関係によって結ばれていた、と言えよう²³⁾。al-Muqaddasī が説明したように、10世紀後半におけるマグリブ地方の諸都市の経済と文化の繁栄は華々しく、東方のそれらを凌駕する発展が見られたのであって、両地域間には文化的経済的格差と断絶は少なかった²⁴⁾。また、11世紀半ばから12世紀後半までの社会経済の諸状況をよく伝えている Cairo Geniza 文書によっても、Tunis, Tarābulus (Tripoli) と Alexandria とを結ぶ海上交通と貿易や Barqa 経由の陸上キャラバンを通じて、イフリキヤ〜エジプト・シリア〜ヒジャーズと、さらに遠くはイエーメンやインド・マラバル地方とも頻繁な交流関係のネ

ットワークによって結ばれていたことが判る²⁵⁾。al-Maqqarī の記す“アンダルス人の東方諸地域へ赴いた旅行者たちの列伝” *fi'l-ta'rif bi ba'd man raḥala min al-Andalusiyin ilā bilād al-mashriq* から、9世紀半ばから12世紀半ばまでの300年間に東方旅行をした学者・知識人たちの数は極めて多い²⁶⁾。

このように、マグリブ諸地方・都市の繁栄は、地中海世界、東方地域とサハラ南縁・オアシス都市との間に結ばれた人・物資と情報などの活発な交流関係に基礎を置いていたのである。Ibn Khaldūn が指摘したように、マグリブ地方の都市文明の繁栄は、豊かな文明と学問の伝統を育み、教育と技術の発展を促した²⁷⁾。

しかし、経済・社会と文化的諸関係の上で、マグリブと東方との両地域間に大きな分離現象が引き起こされた。その最初の契機は、ファーティマ朝の軍事・政治体制の中心がイフリキヤ地方からエジプトに移動したことに付随して起った。確かに、ファーティマ朝時代には、インド〜イエーメン〜ヒジャーズ〜シリア・エジプト〜マグリブとを結ぶ東西に広がる幅広い交流圏が形成されて、インド洋世界と地中海世界とが一体化した機能を果たしていた。しかし、ファーティマ朝勢力の東漸は、マグリブ地方と東方の諸地域とを結合していた重要な窓口イフリキヤ地方から軍事・政治的経済的核心が取去られて、そこに大きな力の空白地帯をつくる結果をまねいたと言えよう²⁸⁾。事実、ファーティマ朝勢力の東漸以後、

22) *op cit.*, pp. 196–197.

23) Ibn Jubayr の巡礼記は、12～13世紀の地中海における国際関係の大きな変貌を伝える極めて重要な史料といえる。cf. S. D. Goitein, *A Mediterranean Society.*, I, pp. 29–32.

24) al-Muqaddasī は、マグリブ地方の諸都市は東方イスラムの諸地方より発達し、繁栄が著しいため、必然的に前者の説明が詳しく長文になることを懸念している (*Aḥsan al-Taqāsīm.*, 228, 235)。

25) S. D. Goitein, *A Mediterranean Society.*, I, pp. 148–149, 211–213, 273–277 及び同著者による *Letters of Medieval Jewish Traders*, p. 25, *passim*, Princeton U. P., 1973.

26) *Nafh.*, I, pp. 463–943. 併せて、前嶋信次、「東西交通史料としてのアル・マッカリーの史書——11世紀スペインのアラブ人の中国渡来記録——」、『東西文化交流の諸相』再録, pp. 79–94. 参照。

27) *al-Muqaddimat.*, pp. 770–73, 777–79.

28) cf. S. D. Goitein は、ファーティマ朝政権の中心がイフリキヤ地方からエジプト・シリア地方に移動したことは、単に政治的軍事的問題に留まらず、地中海社会の分裂と変貌をもたし、人間交流と経済・流通の諸関係にも大きな影響を及ぼしたことを強調している (*A Mediterranean Society.*, I, pp. 29–55)。

マグリブ地域には広く軍事・政治的諸勢力の再編成と都市・農村と遊牧社会などの諸情勢にも数多くの変容現象が見られた。Hilali と Sulayma のアラブ遊牧民によるアトラス山間部の諸都市と農耕地への侵掠と荒廃化、キリスト教勢力のイベリア半島南下にともなうアンダルス・ムスリム社会及び文化の崩壊、移住・逃避者の増大、サハラ・オアシス地域のベルベル系諸部族の自立と抗争激化、地中海におけるイタリー系および南フランス系商人・航海者たちの進出、そしてノルマン勢力の地中海進出など、アンダルス・マグリブ地方の内外から加えられた数々のインパクトの影響を受けて、その地域社会全体が大きく流動し、共同体的諸集団の分離・解体と再編、社会・経済価値感の変動、新しい文化・思考基準の模索、などが見られた²⁹⁾。こうした社会、経済と文化の各分野にわたる変動、そして再編への道を模索していた時期に、マグリブの人々はベルベル・ムスリム社会・文化の独自の展開とマグリブ郷土意識 *ḥubb al-waṭan* を自覚し、その傾向が強くなれば同時に東方地域との分離・疎外感を抱くようになっていった³⁰⁾。スーフィー・タリーカの拡大が多重多層であったベルベル部族社会間を結びつけて、マグリブ・イスラム文化の均質・統合化を形

成するうえで大きな役割を演じた³¹⁾。イスラムのマグリブ土着化傾向が深まれば、当然そこには中心部イスラムへの原点回帰の運動が強まった。即ち、東方イスラム世界への憧れとその輝かしいイスラム文化と学問・教育の伝統を習得し追随しようと待望する意識が、マグリブ学者・知識人たちの間に高まった³²⁾。それ故に東方地域への旅を通じて、多くの高名な学者・知識人や聖者たちといかにして面識をもち、具体的に何の講義・講読を受けたか、また弟子たちとの交遊関係、などの記録を具体的に報告することが、彼らの強く待望するところとなった。優れた学者・教育者は、より多くの学問探求の旅 *al-riḥlat al-‘ilmīya* をした人物であって、多分野にわたる学問の量と修得の内容に応じて、郷里マグリブ地方に戻ったときに迎えられる社会的宗教的地位と学者・教育者としての権威が評価・決定された³³⁾。

イスラム世界の東西にわたる拡大を通じて、異なる発展段階と思考様式、生産・生活様式をもった多種多様な人間集団・社会と文化を包摂しつつ、イスラムは自ら変容し多様化の傾向を強めていった。しかしまた、地域変容と多様化の傾向が強まれば強まる程、一方ではイスラムのそうした時代方向を修正し、

29) これらの変貌は、地中海世界とマグリブ地方だけに起った特殊現象ではなく、10～11世紀を軸とした世界的転換期の問題として捉えるべきであろう。

30) Ibn Khaldūn の『歴史序説』*al-Muqaddimat* の叙述は、亡命移住アンダルス人の強い郷土意識 *ḥubb al-waṭan* と東方の諸地域の文明に対する憧れ及び劣等感に満ちている。この意識は、マグリブ人のすべての巡礼記 *al-Riḥla* に共通して認められる。彼らは東方の諸地域・都市を旅している時に、その高度文明に対する憧れと同時に郷土マグリブの自然、風土と民情に対する深い郷愁を抱いていた。例えば、al-Qalṣādi は、‘Abd al-Malik b. Ḥabīb の *qaṣīda*、その他を引用して、マグリブ郷土愛 *ḥubb al-waṭan* を謳いあげている (pp. 156–158)。

31) 12～13世紀以降のインド亜大陸各地と類似して、マグリブ地方でも各派のスーフィー・タリーカが活動を広げて、土着の伝統的諸信仰・思考様式との融合化が進んだ。同時期のインドにおけるスーフィーの普及については、Saiyid Athar Abbas Rizvi, *A History of Sufism in India*, I, pp. 83–113, New Delhi, 1975 参照。ベルベル部族国家の形成とイスラム文化・教育の普及にスーフィー・タリーカの組織力が活用されて、マグリブの地方的特質が一層顕在化した。その外縁的拡大のエネルギーがサハラ南縁部スーダン・サーヒル地域のイスラム化運動を生んだと言える (cf. *The Cambridge History of Islam*, II, pp. 614, 620–29; *The Cambridge History of Africa*, III, Chap. 4)。

32) 特に、Ibn Khaldūn, *al-Muqaddimat.*, pp. 774～79 参照。

33) *Fahrasat al-Raṣṣāʿ.*, Intro. 参照。

汎イスラム的共通文化の形成と発展を助長しようとする大きなエネルギーが生まれていたことも否定出来ない。とくに、マグリブ地方だけに限らず、サハラ南縁、東アフリカ、インド亜大陸、中央アジアやインド洋周辺部などの、言わばイスラム世界の周縁部地域のムスリム知識層のひびとや国家統治者たちは、世界の中心部に位置するヒジャーズ、エジプト、イラク、イランやシリアなどの諸都市で展開される文化・教育と思想の新しい潮流に強い関心を抱いていた。彼らは、正統にして輝しい〈本場イスラム〉の学問・教育をつねに吸収し続けることで、地域ムスリム社会に対する宗教的政治的指導者としての確固たる地位を築こうと努めていたのである³⁴⁾。このような周縁ムスリム社会の中心志向が広くイスラム世界の諸地域間の人的交流、文化・情報の伝播と物資の交換関係を活性化し、共通の文化圏としての世界を形成していく、一つの原動力となったことは言うまでもない。とくに、10～11世紀以降におけるイスラム世界の周縁部拡大は、中心部と周縁部との間の交流関係をより一層緊密なものにし、巡礼活動がその中心的役割を演じたのである³⁵⁾。

そこに見られるマグリブ・ムスリム社会の特殊性は、彼らの地理的位置をサハラ砂漠と地中海によって遠く隔てられた、アトラス及びアンダルスの山間僻地にあると看す辺疆・田舎意識、後ウマイヤ朝文化の華々しい繁栄に対する郷愁感、の二つから生まれた郷土意

識(愛) *ḥubb al-waṭan* が激しい時代潮流のなかで増幅・拡大されていく過程で形成された、と看ることが出来る。つまり、そうした精神的孤立感のなかで、巡礼記が彼らの東方の学問伝統への飢餓を癒やす一つの方法となっていた³⁶⁾。

以上のような時代的背景と社会経済的変容の影響を受けて、[I]の時期に、*barnāmaj*の発展形式として、巡礼記 *al-Riḥla* が記録・編述され始めた、と考えられる。

[I]と[II]との間の、12世紀後半から13世紀半ばにかけての時期は、十字軍の侵掠と征服活動が激しく、またエジプト・シリア・ヒジャーズの諸地方を領有したアイユーブ朝政権の後退とそれに代るマルムーク朝体制が開始された時とほぼ一致するのであって、マグリブ人による東方旅行が困難となり、また情報関係や物資の交換などにおいても分離・断絶の傾向が強かった。そうした理由が巡礼記 *al-Riḥla* の編述活動を一時的に後退させた、と考えられる。

[II]の時期には、マグリブ人の東方活動が再び活発化して、多くの巡礼者、知識人や商人たちがエジプト、シリアの諸都市を訪れて、学問教育の修得と集収が可能になった。また、東方の諸地域へのマグリブ人の亡命・移住者たちの数が増加して、Alexandria、カイロ、Qūs、ダマスカスなどの大都市には彼らのコミュニティが形成されて、恒常的な人的交流、経済・流通関係と情報等のネットワークが成

34) 東アフリカ海岸のキルワ、マルディブ群島の Mahal やスーダン・サーヒル地域などに形成されたムスリム王国の支配者たちは、メッカ巡礼の義務を遂行することによって、王権の正統性、あるいは神格性を民衆の前に示そうとした。cf. *Kitāb al-Sawwat fī Akhbār Kilwa* (Ms. British Museum, OR. 2666), ff. 9a–10b, 12a, 13b; Ḥasan Taj al-Dīn, *Ta'riḥ Dībā Mahal* (Ed. H. Yajima, Tokyo, 1982), pp. 32, 33–34, 39, 43, 51, 55 passim. また Takrūr 王のメッカ巡礼の事例 (*al-Maqrizi, al-Dhabab al-Masbūk.*, Ed. J. al-Shayyāl, Cairo, 1955, pp. 110–113) 参照。

35) メッカ巡礼を遂行しようとするムスリムたちの宗教的情熱は、むしろイスラム世界の周縁部で高まった。このように巡礼の広域化と地域社会への影響力増大が、13～14世紀、17～18世紀、20世紀などの、言わば時代変革の時期に進行したことは注目すべき現象である。スーフィー・タリーカの普及と拡大が地方的な聖地・墓廟への参詣も含めて、巡礼熱の高まりに大きな動因となったことは言うまでもない。

36) cf. *Enc. Is.*, New Ed., I, p. 96, “AL-‘ABDARĪ”.

立した³⁷⁾。マグリブ巡礼者たちの多くは、このようなネットワークを利用しつつ、同郷出身の高名な学者たちを訪ねて、学問の修得に努めた。また、旅の宿泊の世話、交通運輸の手配とその他の必要な情報の提供にも相互に強い郷土意識が発揮された³⁸⁾。al-Maqrizīの年代記に依っても、マムルーク朝のスルタン al-Manṣūr Sayf al-Dīn Qalā'ūn から al-Naṣīr Muḥammad の時代に、マグリブ人の巡礼者数が増加していたことが知られる³⁹⁾。

一方、マグリブ地方やサハラ南縁・スーダン地方からの巡礼・旅行者たちの通過と受け入れ側であるマムルーク朝は、アイユーブ朝と同じく、シーア社会に代るスンニー体制を基本とした国家統治を確立するために、*ribaṭ*, *zāwiya*, *khānqāh* や *madrasa* などのイスラム学術研究、教育と交流のセンターを建設し、これらをワクフ財産として経営・維持し、高名な学者・教育者たちの招へい、弟子たちの養成と巡礼・旅行者たちの宿泊・食事提供にも便宜を提供した⁴⁰⁾。これらの施設は、知識人や民衆の間に広がりをもせていたスーフイズムの文化と教育活動の拡大にも大きな役割を果たした。また国家は、遠方からの巡礼・旅行者や商人たちの訪問を活発にするために、巡礼キャラバン隊 *al-rakb* の護衛、道路・停泊地と水場の確保、スルタン書簡の交付、関税負担の軽減、などの通行と滞在の安全を保

障するような諸政策を施いた⁴¹⁾。このように、東方の諸国のとった巡礼・旅行者の誘致策によっても、マグリブ人たちの巡礼熱は高まり、彼らの学問修得を推進していくうえで、大きな力となった。

以上のような諸状況のなかで、多くのマグリブ人たちが東方の諸地方に向けてメッカ巡礼の遂行と学問修得のための旅に出た。[II]の時期には、Ibn Rushayd, al-Qāsim al-Tujībī, Ibn Baṭṭūṭa や al-Balawī などの筆録者によって、重要な巡礼記 *al-Riḥla* が相継いで記録・編述されたのであって、記録文芸のジャンルとしての巡礼記が確かな形式と叙述内容を調えた時期でもあった。これらの代表的巡礼記は、多分野に亘る豊かな記載内容を含んでおり、また後の時代の多くの巡礼記によって直接・間接的に引用・踏襲された、と言う点から見て、極めて重要な価値をもっている⁴²⁾。

さて、1350年前後の時期に世界的規模で発生した天候異変、病虫害と疫病などの影響は、とくに西アジア諸都市の流通経済、産業と農業の活動および遊牧民たちの牧畜・移動にも大きな影響を及ぼして、既存の国家支配体制、経済と社会の全般にわたる構造的変化をもたらした⁴³⁾。

Tarābulus, Barqa, ナイル・デルタ付近、上エジプト、'Aqaba やヒジャーズ地方など

37) マグリブ人のエジプト・シリアの諸都市への亡命・移住は、フィーティマ朝政権のエジプト支配以後おこった。Cairo Geniza 文書には、多くのマグリブ・ムスリム達がエジプトへ移住していく過程が極めて印象的に描かれている。彼らの移住は、(1)両地域間を結ぶ商業のための往来、(2)エジプトに家を所有し、その家族はチュニジアに残す、つぎに、(3)家族すべてを呼びよせて永住する、の三つの過程が見られた。Alexandria, カイロや Qūṣ などに移住したマグリブ人については al-Rushayd, al-Tujībī, al-Balawī などの13~14世紀の巡礼記に詳しい。また、上エジプト地方には、マグリブ人出身者の村が形成された (W. Dols, *The Black Death in the Middle East*, pp. 168-9, Princeton U. P., 1977)。そうしたマグリブ地方からの移住者たちのなかには、イラン系のニスバ (al-Nisābūrī, al-Nihāwandī, al-Samarqandī, al-Khurāsānī, al-Kirmānī, al-Tūsi など) をもった人びとがいた。彼らの父または叔父たちは、10世紀半ば以前にマグリブの各地に移り住んでいた。cf. S. D. Goitein, *A. Mediterranean Society.*, I, pp. 30-33, 56-59.

38) Ibn Baṭṭūṭa は、こうした移住マグリブ人のネットワークを広く利用しながら、アナトリア、イラン、インド、中国などの各地を旅行した。多くの巡礼記 *al-Riḥla* を通じて、メッカ巡礼に出る目的の一つが、東方に移住したマグリブ人の同郷・同族出身者を訪ねて、交流を深めるための旅であったことが判る。従って彼らの旅行・宿泊と学問修得の機会がこれらの移住マグリブ人たちにより与えられていた。

を生活舞台としていたアラブ系遊牧民たちの動向がマグリブ地方と東方諸地域を結ぶ交通運輸、貿易と情報関係を左右する重要な要素であった。ところが⁴⁴⁾、これらの諸地域で遊牧民たちによる反乱、侵掠とルート寸断が

続発して、マグリブ人の東方活動にも大きな支障を生じた。また、マムルーク朝の支配体制にも、スルタン al-Nāṣir 治世の終りにはその放漫な財政と国庫収入の大幅な減少、マムルーク軍人への俸給支払いの遅延などに

- 39) マグリブ巡礼者たちの数について、その実数を捉えることは極めて難しい。彼ら巡礼者たちの多くは、(1)カイロでエジプト巡礼隊 *al-Rakb al-Miṣrī* と合流したために、マグリブ巡礼隊 *Rakb al-Maghāribā* として記録されることは少なかった、(2)マグリブ巡礼隊のなかにも Takrūr やその他のサハラ・スーダン地域からの巡礼者たちが含まれていた、(3)その他の諸地域からの巡礼者についても、残された記録は極めて曖昧であって、例えば“かなり多数”、“例年通り”、“ほとんどなし”などの表現で叙述されて実数を挙げない、(4)国家指揮による巡礼隊 (*amīr al-ḥajj*) の任命と *maḥmil* の護送) に関する記録が主であり、小巡礼 *‘umra* や個人規模での巡礼の情報はほとんど残さない、などの理由による (cf. ‘Alī b. Ḥusayn al-Sulaymān, *al-‘Arāqāt al-Ḥijāzīyat al-Miṣrīyat Zaman Salāṭīn al-Mamālīk*, pp. 96–99, Cairo, 1973). al-Maqrīzī, *al-Sulūk*. 及び ‘Abd al-Qādir al-Anṣārī al-Jazīrī, *Durar al-Fawā’id al-Munazzamat fī Akhbār al-Ḥajj wa Ṭarīq Makkat al-Mu‘aẓẓamat* (Ed. Muḥibb al-Dīn al-Khaṭīb, pp. 186–400, Cairo, A. H. 1384) によって、マムルーク朝初期より A. H. 955 までのマグリブ人によるメッカ巡礼の状況を記せば、次の通りである。S=*Sulūk.*, D=*Durar*. A. H. 671, マグリブ巡礼者襲むる (D., p. 284); A. H. 677, エジプト巡礼者数 40,000人 (D. p. 284); A. H. 704, マグリブからの正式巡礼隊 *Rakb al-Maghāribā* 再開 (S., II, p. 9); A. H. 721, 例年より多数の巡礼隊出発。エジプトより 7 隊 (S., II, p. 214); A. H. 724, Takrūr 王 Mansā Musā, 巡礼の途中カイロ訪問 (S., II, p. 255, D., p. 300); A. H. 738, マグリブ人巡礼。Fās の支配者スルタン Abu’l-Ḥasan Ya’qūb の母およびマグリブ人多数 (D., p. 306); A. H. 744, マグリブ巡礼者 10,000 人以上, Takrūr 巡礼者約 5,000 人カイロに集結 (S., II, p. 654); A. H. 752, マグリブおよび Takrūr からの巡礼者多数 (D., p. 309); A. H. 783, 巡礼の途中, マグリブ人多数が殺害さる。Takrūr 巡礼者も同行 (D., p. 313); A. H. 785, マグリブ巡礼者, Takrūr 人と一緒にアラブ遊牧民との戦闘で殺さる (S., III, pp. 508–9); A. H. 790, マグリブ人および Takrūr の巡礼隊 2 隊, エジプトの 7 隊と合流, 合計 9 隊を編成 (S., III, p. 586); A. H. 794, マグリブ地方のアラブ・アミール Abu’l-Ḥajjāj のカイロ訪問 (S., III, p. 764), 同年マグリブ巡礼者たちカイロ訪問 (S., III, p. 774); A. H. 810, マグリブ人, メッカからの帰り, Alexandria, Ghaza, Quds の巡礼者たちと一緒に進行中, 襲撃をうけて大損害を被る (S., IV, p. 54); A. H. 819, マグリブ人たち, 慣例どおりに Alexandria, Ghaza, Quds の巡礼者たちと一緒にメッカより合流して戻る (D., p. 318). 同年, Takrūr の巡礼隊, 1,700 人の奴隸男女と一緒にメッカ巡礼 (S., IV, p. 368, D., p. 320); A. H. 823, スルタン al-Malik al-Ẓāhir Barqūq の宮殿と周壁を改修して, マグリブ巡礼隊の宿泊地とする (S., IV, p. 529); A. H. 834, スルタン Barsbay による巡礼道の整備 (D., p. 326, S., IV, 853, 859–60, 870); A. H. 835, マグリブ巡礼隊の到着。Takrūr の巡礼隊も同行。彼らの持参した馬, 奴隸, 衣類に対して関税 *maks* 徴収が強化された (S., IV, p. 872). 同年, Takrūr 王侯の一人, al-Tūr より海路メッカへ向かう途中死去 (S., IV, p. 876); A. H. 837, マグリブ地方および Takrūr からの大巡礼隊 (S., IV, pp. 917, 919; D., p. 326); A. H. 842, Takrūr の巡礼隊到着。奴隸, 金塊など多量にもたらす (S., IV, p. 1135); A. H. 847, Takrūr の大巡礼隊到着 (D., p. 329); A. H. 849, マグリブ人と Takrūr 人の巡礼隊の到着 (D., p. 330); A. H. 858, マグリブ人巡礼者たち, Takrūr の人々と一緒にアラブ遊牧民に襲われる (D., p. 332); A. H. 889, マグリブ巡礼隊, マグリブ王の妻らとメッカ訪問 (D., p. 342); A. H. 896, マグリブ地方からの巡礼者なし (D., p. 344).
- 40) 家島, 「マムルーク朝の対外貿易政策の諸相」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』, 20 (1980), pp. 39–40 参照。例えば, Ibn Battūta, I, pp. 71–74 の記録参照。
- 41) *ibid.*, pp. 32–41 参照。
- 42) 後述 pp. 208, 214 参照。
- 43) 家島, 「マムルーク朝の対外貿易政策の諸相」, pp. 53–56 および関連の注説明参照。
- 44) 多くの巡礼記では, これらの交通要衝での遊牧民の動向について詳しい叙述が見られる。後述 p. 214 および家島, 「マムルーク朝」, p. 55 (n. 97) 参照。

原因するマムルーク軍団内部に起った反体制勢力の台頭、反乱と陰謀が相続いで起り、国家と社会全体は不安な状況につつまれていった⁴⁵⁾。

以上のような影響をうけて、14世紀後半から15世紀前半までの期間には、明らかにマグリブ巡礼者たちの数は減少しており、従って巡礼記の編纂活動にも退潮が見られた⁴⁶⁾。

[III]の時期の巡礼記は、ブルジー・マムルーク朝による国家・軍事体制の再建の過程とマグリブ社会の巡礼志向の高まり、東方諸国の学問と教育伝統への渴望などの諸情況のなかで、東方地域に向けて旅立った人びとによって記録・編述されたと考えられる。ブルジー・マムルーク朝時代のエジプトは、国家権威の失墜と社会・経済の不安が高まっていたにもかかわらず、とくにカイロ・ミスルにおいて多くのモスク、マドラサ、*khānqāh* や病院が建設された⁴⁷⁾。また、イスラム諸学と教育の交流、神学、法源学、コーラン・伝承学やスーフィー・タリーカの諸派の活動が活発化して、全イスラム世界の学術・文化と教育活動の一大センターとしての機能を果たし続けた。Aḥmad b. Muḥammad al-Hashtūkī と al-Qalṣādī の二人は、スルタン Barsbay

(al-Ashraf Sayf al-Dīn, 825/1422–841/1437)の治世代に、カイロ・ミスルを經由してメッカ巡礼を行ない、復路にも再びカイロを訪問し、多くの学者・知識人たち *shuyūkh*, *fuqahā'* やマグリブ出身の聖人・賢者たちと会い、学問修得する機会を得た⁴⁸⁾。

Barsbay の治世より al-Zāhir Jaqmaq (842/1438–857/1453)の時代までは、多くのマグリブ人やスーダン・サーヒル地域の Takrūr 人たちが巡礼を果たしているが、それ以降、16世紀後半までの約150年間にわたって、巡礼活動は衰退した⁴⁹⁾。とくに、疫病、マムルーク朝国家の権威失墜とオスマン・トルコ、トゥルクメンとの軍事外交関係の悪化、メッカ・シャリーフ達の対立・抗争などの影響で、ヒジャーズ地方及びシリア各地での治安の悪化、交通運輸道の途絶が起ったことにその原因が求められる⁵⁰⁾。東方諸地域との交流関係の断絶は、マグリブ社会・文化の独自の発展を促がし、その活動の外的展開はサハラ・オアシス都市や南縁部のスーダン・サーヒル地域へと向けられた⁵¹⁾。

[IV] から [VI] までは、ほぼ連続的に数多くの巡礼記が記録・編述された。とくに、ヒジュラ暦1000年前後には多くのマグリブ巡礼

45) 家島、「マムルーク朝」, p. 92 (n. 482) 参照。

46) 各地域から集まる巡礼者の大幅な減少は、*Durar.*, pp. 310–12 による A. H. 756 以降の記事によっても明らかである。とくに、ヒジャーズ地方の軍事的経済的支配権をめぐるマムルーク朝とイエーメン・ラスール朝との間の激しい対立・抗争がイスラム世界の各地から集まる巡礼者たちの安全を脅かした。この二大勢力は、別々のメッカ・シャリーフ達と結びついて深刻なメッカ社会の内部闘争と分裂を生じ、14–15世紀のメッカ・ヒジャーズ地方を著しく混迷状態に陥れた。家島、「マムルーク朝」, pp. 64–65 参照。

47) スルタン Barsbay によるメッカ巡礼道の整備、治安維持の諸政策については、*Sulūk.*, IV, pp. 853, 859–60, 887; *Durar.*, p. 326 参照。マムルーク朝後期における学問・教育施設の建設・修理については、I. M. Lapidus, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Appendix A–C, Harvard U. P., 1967 参照。

48) *Riḥlat al-Qalṣādī.*, pp. 126–129, 147–159.

49) *Durar* (pp. 326, 329–332) は、A. H. 837, 847, 849, 850, 858 年にマグリブ地方および Takrūr からの巡礼隊が来たことを伝えている。それ以降は、A. H. 889 のマグリブ巡礼隊 (p. 342) のみであり、A. H. 896 の記事ではマグリブ地方からの巡礼者が全く絶えたことを伝えている (p. 344)。

50) 例えば、*Sulūk.*, IV, pp. 1046–48, 1068, 1070–71, 1185–6; Īyās, *Badā'ī'*, III, 104–5 など参照。

51) サハラ・オアシス都市およびサハラ南縁スーダン・サーヒル地方のイスラム化進行過程、国家形成とマグリブ地方との文化交渉については、*The Cambridge History of Africa*, III, Chaps. 4–5; *The Cambridge History of Islam*, I, Chap. 6; *The Western and Central Sudan and East*, pp. 345–381; 'Abd al-Qādir Zubādiya, *Mamlakat Sunghāy fī 'Ahd al-Asīqiyyin*, Alger, 1971 など参照。

団がオスマン・トルコの支配下に置かれたイフリキヤ、エジプト、シリアなどの諸地方を通過して、メッカ巡礼を行ない、復路には新興のイスラム学術と教育センターとして急激な発展を遂げたイスタンブールを回って、学者・知識人と面識し、学問・教育の修得に努めた⁵²⁾。

3. 巡礼記筆録者たちの出身地

さて、巡礼記の筆録・編述者たちの生地と教育を受けた場所をみると、(1) アンダルス地方：Sevilla, Valencia, Granada, Basta, Cordoba, (2) 極西マグリブ地方 *al-Maghrib al-Aqṣā*：Sabta (Ceuta), Tangier, Fās, Tlemsan, Tetuan, Marrakesh, Sūs al-Aqṣā, Sijilmāsa, (3) サハラ・オアシス地域：Walāta, Wādān, Futa Jalon, (4) 中央マグリブ地方 *al-Maghrib al-Awsaṭ*：al-Jazā'ir (Alger), Qusumṭīn (Constantine), Bijāya (Warthilān), (5) イフリキヤ地方 *Ifriqiya*：Tunis, などがある。

以上の筆録者たちの生地別の地理分布を考慮すると、巡礼記の筆録者は圧倒的にアンダルス地方、もしくは極西マグリブ地方を生地、または教育・学問活動の舞台としていたことが判る⁵³⁾。さらに、Walāta, Wādān と Futa Jalon などのサハラ・オアシス出身の学者たちも含まれている。反面、中央マグリブ地方やイフリキヤ出身の筆録者は極めて少ない。この事実は、巡礼記に対するアンダルス・極西マグリブ地方の知識人たちの関心が殊更に高かったことを示している。東方諸地方に通じるマグリブ地方の窓口位置したイフリキヤ地方の人々より以上に、アンダルス・極西マグリブ地方の人々は、自らをイスラム世界

の周縁部に位置すると考える辺疆意識と郷土の連体感を強く抱いていた。従って郷土マグリブ・イスラム文化の正統な発展を切望し、同時に豊かな文明と教育の伝統とを存続しているイスラム文化の中心地＝東方の諸都市に対する憧れも一層強かったと思われる⁵⁴⁾。都市文明は消滅し、田舎や砂漠生活に近づきつつある危機感のなかで、マグリブ学者・知識人たちは都市文明を再興する道として、東方の先進諸都市との学術・情報交流を活発化し、頼るべき権威者による諸学——思弁神学・法源学・法学・言語・文章論・コーラン・伝承学など——の修得に努めた⁵⁵⁾。アンダルスと極西マグリブ地方における巡礼記 *al-Riḥla* の記録・編述は、このような状況のなかで生まれ、発展を遂げた、と考えられる。

4. 巡礼ルートの変遷

メッカ・メディナに通じる巡礼ルートは、いつの時代にも同一のルート・経由・停泊滞在地を通過して結ばれていたのではなく、(1) 天候の変化と季節のちがひ、(2) 交通運輸の手段の変遷（ラクダ、ラバ、馬、自動車や船舶など）と道路（航路）の開発、(3) 往復路における戦争・略奪や国家及び諸勢力の興亡、部族間の対立・抗争、(4) 社会的経済的情况、などの諸条件によって大きく左右されていたことは言うまでもない。さらに重要な点は、巡礼者たちの旅の目的が単に彼らの宗教義務を遂行するだけに留まらず、学問修得、学者・知識人との面識、有徳・聖者の墓廟参詣、亡命移住、出稼ぎや商売などの多岐多様な目的と動機を併せもっていたことが、巡礼ルートの経路、滞在地と旅行日数を多様なものにしてきた⁵⁶⁾。

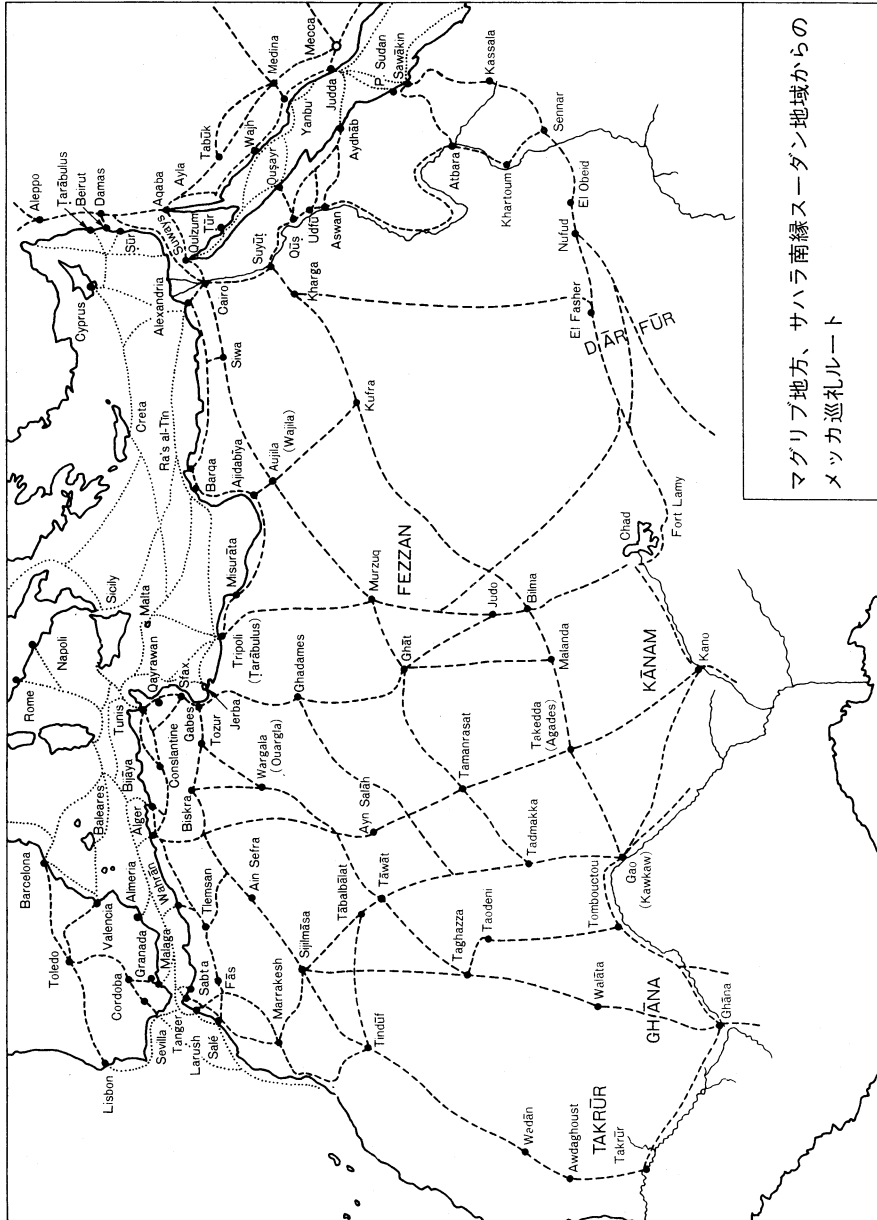
52) cf. Abū 'Abd Allāh al-Zayyāni, *al-Tarjamat al-Kubrā*, Ed. 'Abd al-Karim, pp. 74–75, Rabat, 1967.

53) イフリキヤ地方の学者・知識人たちのなかには、Ibn Khaldūn に代表されるように、アンダルス地方からの亡命移住者が多かった。とくに、ムワッヒド朝の崩壊以後、彼らの移住は、増大した。cf. Ibn Khaldūn, *al-Muqaddimat.*, pp. 660–61.

54) このような意識は、とくにアンダルス地方より亡命・移住の知識人たちの間に強かった、と思われる。cf. Ibn Khaldūn, *al-Muqaddimat.*, pp. 660–61, 717–18, 772–77.

55) cf. Ibn Khaldūn, *al-Muqaddimat.*, pp. 772–77, 1044–45.

56) *op. cit.*, n. 1.



マグリブ地方、サハラ南縁スーダン地域からの
メッカ巡礼ルート

マグリブ巡礼者たちの多くは、メッカ巡礼の往復路で、マグリブ地域内の宗教活動と文化・教育のセンター——Tlemsan, Fās, Bijāya, al-Jazā'ir, Tunis, Qayrwān など——を回って学問と教育の傾向を探求し、また学者・知識人との面識と交流、弟子たちとの交遊関係、聖賢者たちの墓廟参詣、宗教施設と史蹟の訪問などを行なった。とくに、Qayrawān の史蹟を回った後、Tunis に集結し、国家の統率・管理する巡礼隊 *Rakk al-Maghāriba* と合流して、東方に向かうマグリブ巡礼者たちが多かった。また、Tunis にはサハラ・オアシス都市や南縁のスーダン・サーヒル地域から来た巡礼者たちも集まった⁵⁷⁾。マグリブ巡礼隊は、カイロにおいてエジプト巡礼者たちと合流し、エジプト巡礼隊 *al-Rakk al-Miṣrī* の一部を編成の後、聖地メッカ・メディナに進んだ⁵⁸⁾。

つぎに、巡礼記 *al-Riḥla* に依って、アンダルス・極西マグリブ地方とメッカを結ぶ主要な巡礼ルートと経由・滞在地を考えてみよう。アンダルス地方の主要都市 Sevilla, Granada, Cordoba などを出発した巡礼者たちは、Almeria, Malaga, Valencia などの港市から船で Ceuta または Oran (Wahrān)

に渡って、Tetuan, Fās, Maknes, Tlemsan などの学術・宗教都市に滞在した。al-Qalṣādī は、Granada の外港 Al-Mankab (Almunecar) から Oran に渡り、往復路ともに Tlemsan を訪問して多くの著名な学者たち *shuyūkh* との学問交流を行なった⁵⁹⁾。

Tlemsan を基軸として、(1)アトラス北道：Oran, al-Jazā'ir, Bijāya, Constantine, Tunis ルート、(2)中央道：al-Masila, Bāgha, Qayrawān, Tunis ルート、(3)アトラス南道：Tāhart, Biskra, Tuzūr, Gabes ルート、の三つのルートに分岐した。とくに、11~12世紀以降、al-Jazā'ir と Bijāya の二都市がアンダルス・極西マグリブ地方の各地から集まる多くの学者・知識人たちを受け入れて、文化・教育活動が隆盛するようになると、(1)のルートを選んで Tunis に至る巡礼者たちが増加した⁶⁰⁾。

Tunis とエジプト間のルートは、海上ルートと陸上ルートに分かれた。14世紀の初頭、Ibn Baṭṭūṭa と al-Balawī は、いずれも1~2年の違いで極西マグリブ~カイロ間を旅しているが、Tunis より前者は陸上ルートを、後者は地中海の海上ルートを選んで Alexandria に達している⁶¹⁾。Cairo Geniza 文書に

57) スーダン・サーヒル地方からの巡礼者たちは、Sijilmasa, Ghadames, Ghat ルートを通して Qayrawān, Tunis に集まった。このルートを通して Tunis に集まり、マグリブ巡礼隊 *Rakk al-Maghāriba* の一部として東に向った。カイロやメッカでは、つねにマグリブ人と同一行動をした、と思われる。Sulūk., II, p. 654; Durar., pp. 300, 309, 313, 320 などの事例参照。A. H. 724, Takrūr の王 Mansā Mūsā は、マグリブ人および彼の召使いたち20,000人を同伴して、巡礼の途中エジプトを訪問した。彼が通ったルートについては不明な点が多いが、おそらく Sijilmasa~Tunis ルートであったと考えられる。al-Maqrīzī, *al-Dhahab al-Masbūk.*, pp. 110-113; Sulūk., II, p. 145; al-Qalqashandī, *Ṣubḥ.*, V, pp. 293-98 など参照。

58) cf. 'Ali b. Husayn, *al-'Arāqāt.*, pp. 96-99. メッカに集まる公式の巡礼隊は、(1)エジプト隊 *al-Rakk al-Miṣrī* (カイロ起点)、(2)シリア隊 *al-Rakk al-Shāmī* (ダマスカス)、(3)イラク隊 *al-Rakk al-'Irāqī* (Baghdad)、(4)イエーメン隊 *al-Rakk al-Yamanī* (Ta'izz)、の4隊であってイスラム世界の周縁部から出発した小分隊は、これらの4隊の起点に集結した。cf. al-Suyūṭī, *Husn al-Muḥāḍara.*, Ed. Muḥammad Abu'l-Faḍl Ibrāhīm, II, p. 310; Durar., pp. 438-446. マグリブ隊 *Rakk al-Maghāribat* はカイロに集結し、エジプト隊の一部を構成した後、Birkat al-Hajjāj よりメッカに向った (cf. Sulūk., II, p. 654)。

59) *Riḥlat al-Qalṣādī.*, pp. 95-109, 161.

60) cf. Abu'l-'Abbās Aḥmad b. Aḥmad al-Ghabrīnī, *'Uyūn al-Dīrāyat.*, Ed. Rābiḥ Būnār, Intro., pp. 7-11, al-Jazā'ir, 1970. al-Qāsim al-Tujībī, Ibn Baṭṭūṭa, al-Balawī や Ibn Rushayd などは、すべて Bijāya と al-Jazā'ir に滞在した。

61) al-Balawī, *Tāj al-Mafraq.*, MS. Bibliothèque Nationale, No. Arabe 2286, ff. 26a-27a; Ibn Baṭṭūṭa, *Tuḥfat.*, Ed. C. Defrémery, I, pp. 21-27.

依ると、両地域間の交通運輸と貿易の比率は陸上ルートを通過するもの1とすれば、海上ルートがその倍の2であって、後者の方が優位・安全であったことが判る⁶²⁾。この理由の一つは、GabesとNafūsa高地の間、およびBarqaとナイル河西岸及びデルタ地域との間を移動・遊牧の生活圏としていたアラブ系遊牧民の動向がこのルートを利用する人々の安全性に不確定な要因を与えていたからと考えられる⁶³⁾。海上ルートには、TunisからSūsa, al-Mahdiyya, SfaxとJerba島などのガーベス湾岸ぞいに東進し、Tarābulus, Ra's al-Ṭīnを経てAlexandriaに至る沿岸航路と、Malta, Crete, CyprusとAlexandriaを結ぶ島嶼ぞいの遠洋航路があった⁶⁴⁾。この海上ルートの海運は、フェニキア人の後裔であることに誇りをもつガーベス湾を根拠地とする海上民たちの活躍に大きく依存していたと思われる。彼らは造船技術、航海術と漁撈活動に優れて、チュニジア、キレナイカとエジプト、さらにはシリア海岸とを結ぶ、地中海東南海域を共通の交流圏として広く活動した⁶⁵⁾。

陸上ルートは、Sfax, Gabesを通過して東に進み、Tarābulusで一時滞在の後、Barqa, Tabūk経由でAlexandriaに出てカイロに達する海岸ルートと、Awjila, Sīwa, カイロ

に出るオアシス・ルート、の二つに分岐した。

Tindūf, WalātaやWādānなどのṢanhājaのオアシス諸都市、またスーダン・サーヒル地域(Takrūr, Ghāna, Mālī, Songhay, Kānam)からの巡礼者たちの辿ったルートは、彼らの巡礼途中での多様な目的により、また各時代によっても大きく違った。これらの地域の経済と教育・文化の伝統がアンダルス・極西マグリブとイフリキア地方の諸都市との強い交流関係のなかで形成され発展してきたことから、彼ら巡礼者たちはMarrakesh, Fās, Tlemsan, QayrawānとTunisなどを回ることが多く、輝しいマグリブ文化の遺産と新しい教育・思想の潮流に直接ふれることを望んだ。しかしマグリブ地方の都市文明と経済の退潮が進むにつれて、Ghāt~Fezzanルート、Kharga~Suyūṭルートによるナイル河畔の諸都市との人的・物資と情報面での直接的な交流関係が強まった⁶⁶⁾。1040/1630に、Marrakeshを出発したMuḥammad b. Aḥmad al-Qaysīのように、マグリブ地方を全く経由せずに、Wādī Dar'at, Tābālbālat, Tāwāt, FezzanとWajla (Awjila)などのサハラ・オアシスを辿ってカイロに達する巡礼者たちがいたことが判る⁶⁷⁾。

サハラ南縁のスーダン・サーヒル地域のイ

62) S. D. Goitein, *A Mediterranean Society*, I, pp. 275–81. しかし、冬季には地中海の海上交通がストップするので、その期間、キャラバン運輸が重要となった(*A Mediterranean*, I, p. 277)。

63) 例えば、al-'Abdariの記録 pp. 77, 88–89; al-Bakrī, *al-Masālik wa'l-Mamālik*, Ed. De Slane, pp. 2–3 参照。

64) 東地中海の南海域(Gabes湾~Tarābulus~Ra's al-Ṭīn~Alexandria)では、インド洋で使用する三角帆・縫合型の快速船*Khiṭī*が活動した。インド洋・紅海で早くから発達した三角帆航海の技術と平張り肋骨式造船法は、紅海、東地中海南域を経てイタリー諸都市に伝播したと考えられる。12~13世紀、イタリー航海者たちは、これらの新技術を導入して、地中海運輸と貿易への攻勢を遂げた。地中海航路と航海日数については、*A Med.*, I, pp. 88–89 参照。

65) 1976年11月、Sfaxにおいて、ガーベス湾岸の海上民とその文化についてのシンポジウムが開催された。その報告集 *Taḥawwar 'Ulūm al-Biḥār wa Duwar-hā fī al-Numūw al-Ḥaḍārī*, Wizārat al-Shu'ūn al-Thaqāfiya, Tunis, 1979 参照。

66) とくに、マムルーク朝スルタン al-Nāṣir の時代、Suyūṭ 経由のオアシス・ルートを通して、スーダン・サーヒル地方と結ばれた文化的・経済的交流が進展した、と思われる。Ibn Baṭṭūṭa, IV, pp. 397–99 によっても、エジプト商人たちのなかには、これらの地方と直接取引を行う者がいたことが判る。cf. *Ṣubḥ.*, V, p. 296. Suyūṭ 経由、カイロを訪れる Jallāba 商人たちの活動については、T. Walz, "Notes on the Organization of the African Trade in Cairo, 1800–1850", *Annales Islamologiques*, XI (1972), pp. 263–286 に詳しい。

67) Muḥammad al-Qaysī, *Uns al-Sārī.*, Ed. Muḥammad al-Fāsi, Fās, 1968.

スラム化は、チャド・ルートを発達させ、Kharga, Suyūṭ に出るルート、さらに Dār Fūr, Sennār, Kassāla, Sawākin を経由して、船で紅海を横断、Judda に達するルートなどがあつた。後者の巡礼ルートの発達には、Hausa, Darfur, Sennār, Fung などの黒人系ムスリム王国の形成を促し、メッカ・メディナを中軸とした多面的な人間集団と文化層のネットワークを拡大させた⁶⁸⁾。

さて、エジプトの諸都市、とくにカイロから出発した巡礼者たちは、(1) Ayla, ‘Aqaba, Wajh, Yanbu’ ルート、(2) ‘Aqaba, Tabūk, メディナ・ルート、(3) Suways, al-Ṭūr, Yanbu’, al-Jār, Judda ルート、(4) 上エジプト～Judda ルート、の以上4つの主要ルートのいずれかを辿って、メッカに達した⁶⁹⁾。(4)のルートには、Qūṣ または Qinā’ から Quṣayr に出る Quṣayr ルート、Qūṣ から Garal Umm Khurs の西麓に広がるワーディに沿って南下し ‘Aydhāb に達する ‘Aydhāb ルート⁷⁰⁾、Udfū または Aswān から Ḥumaythirā’ を経て ‘Aydhāb に出る Udfū ルート⁷¹⁾、Wādī al-‘Allāqī を経るルート⁷²⁾ などがあつた。これらの上エジプト経由のルートは、とくに12世紀半ばから14世紀10年代までの、約150年間にわたって、多くのエジプト巡礼者やマグリブ巡礼者たちに利用された⁷³⁾。Ibn Jubayr と al-Qāsim al-Tujībī は、‘Aydhāb ルートを、Ibn Baṭṭūṭa は Udfū ルートを辿って

‘Aydhāb に出た。‘Aydhāb から、紅海横断の平底舟 *jilba, jilāb* を使って対岸の港 Judda に渡り、さらにキャラバンでメッカに達した⁷⁴⁾。14世紀20年代以降、(4)のルートはローカル・ルートと変わり、(1)～(3)ルートが専ら使用され、さらに Barsbay の治世代には(3)のルート、即ち al-Ṭūr 経由の海上ルートが隆盛した。(4)のルートの衰退は、十字軍からの脅威がナイル・デルタやパレスチナ海岸、シナイ半島から除かれたこと、一方、ナイル河畔と紅海を結ぶキャラバン・ルートがアラブ系諸部族およびベジャ遊牧民たちの叛乱・抗争の激化にともなう危険になった、などの原因によつた⁷⁵⁾。

メッカ巡礼の往路と復路は、同一のルート・経由地を辿ることが多かったが、シリア巡礼隊 *al-Rakb al-Shāmī* と一緒にダマスカスに、またイラク巡礼隊 *al-Rakb al-‘Irāqī* と共に Baghdād, さらにホラサン巡礼隊 *al-Rakb al-Khurāsānī* に混じてイランの諸都市を回ることもあつた。Ibn Jubayr はイラク巡礼隊と一緒に Kūfa, Baghdād に出、さらにチグリス河の西岸沿いに al-Mawṣil に達し、ダマスカスを経由、‘Akkā より地中海航路によってアンダルスに戻つた⁷⁶⁾。

先きに説明した [VI] の時期 (18世紀後半～19世紀末) に、ナポリ港を中心とするイタリア系海運による地中海の定期航路網が拡大すると、マグリブ巡礼者たちもこれを利用して

68) *The Cambridge History of Islam*, II, pp. 328–38 及び J. S. Birks, *Across the Savannas to Mecca, the Overland Pilgrimage Route from West Africa*, London, 1978, pp. 8–14 参照。

69) 家島, 「マムルーク朝」, pp. 41–61 参照。‘Aqaba～Yanbu’ ルートについては, *Durar.*, pp. 447–460 に詳しい。また Suways, al-Ṭūr の海上ルートについては *Durar.*, pp. 401–410; Ya‘qūbī, *Kitāb al-Buldān*, Ed. de Goeje, p. 340; Nāṣir Khusraw, *Safar-Nāmah, Relation du Voyage de Nassiri Khosrau*, Trans. C. Schefer, p. 123 参照。

70) Ibn Jubayr によると, ‘Aydhāb ルートには, (1) Mā’ al-‘Abdayn, (2) Dūna Qinā, の2ルートがあつて, 前者は近道である, と (Ed. Wright, p. 65). cf. al-Qāsim al-Tujībī, *Mustafād*, Ed. ‘Abd al-Ḥafīz Maṣṣūr, pp. 196–205.

71) Ibn Baṭṭūṭa, I, pp. 39, 109.

72) 家島, 「マムルーク朝」, p. 43 (n. 246) 参照。

73) *ibid.*, pp. 43–49.

74) Ibn Jubayr, pp. 68–74; al-Qāsim al-Tujībī, pp. 205–218.

75) 家島, 「マムルーク朝」, p. 61 (nos. 327–28).

76) Ibn Jubayr, pp. 203–348.

Beirut や Alexandria との間を往復航海した。例えば、Wādān 出身の Aḥmad b. al-Ṭuwayr は、Tanger より北イタリーの Leghorn に出て、さらに Alexandria まで航海した。また、Muḥammad al-Sanūsī は Napoli, Beirut を経由して、メッカ巡礼を行った⁷⁷⁾。

5. 巡礼記の記載内容

アンダルス・マグリブ地方の学者・知識人たちによって記録・編述された巡礼記 *al-Riḥla* は、その由来が *barnāmaj* または *fihris* と呼ばれる名士・聖賢たち *shaykh (shuyūkh)*, *sayyidī, imām, walī, faqīr* の名籍録にあって、そこから発展して一つの重要な記録文芸のジャンルを形成した事情については、前述した通りである⁷⁸⁾。とくに、Ibn Jubayr の巡礼記は、後の時代に著述された多くの巡礼記によって繰返し引用されて、その美辞を連ねた韻文形式の文体は巡礼記叙述の模範とされた。また、[II] の時期、即ち Ibn Rushayd, al-Qāsim al-Tujībī, Ibn Baṭṭūṭa や al-Balawī などの著者たちによって大部の巡礼記が相継いで記録・編述されると、マグリブ人の巡礼記 *al-Riḥla* は、ヒジャーズ巡礼記 *al-Riḥlat al-Hijāzīya* として確かな地歩を得た。

しかし、[III] の時代以降になると、巡礼記の叙述には [II] の時期に見られたような自然地理・ルートと交通運輸や都市社会、習慣などに関する生き生きとした筆者の見聞体験 *'iyān* の記録は失われて、本来の *barnāmaj* 形式の内容——学者・知識人や聖賢たちの略伝、*qaṣīda*、著書と学問系譜や弟子たちの名前の羅列——にもどる傾向が見られた。なお、このような *barnāmaj* 形式の叙述法は、編年史書・地理書・百科全書など、マグリブ人による

多くの著作物にも共通して見られる傾向と言えよう⁷⁹⁾。

巡礼記の記録内容は、極めて多岐多方面にわたっているが、主要なテーマについて整理して示せば、以下の通りである。

(1) 交通運輸の状況

旅と交通は不可分の関係にあり、巡礼者たちが陸上交通と水上交通を使って往来するための旅の手段・道具（船、ラクダ、馬）、食糧の調達、旅による疫病・死、盗財などの不安、ルート、停泊地、渡場、砂漠横断の基地、水場、里程などが叙述の対象とされたことは言うまでもない。とくに、陸上交通における遊牧民の動向とキャラバン運輸における彼らの役割の叙述に注意がむけられた。アラブ遊牧民たちの活動拠点に位置した Tarābulus, Barqa, 上エジプトの Qūs~'Aydhab, 'Aqaba などは、マグリブ巡礼者たちにとっての通行難所であって、旅の安全にかかわる重要な場所として記録されている。

(2) 都市の叙述、宗教・教育施設など

大都市においての巡礼者たちの宿泊地は、*funduq, khān, zāwiya* や大モスクの一部などにあって、また市街の周囲や外側 *khārij al-madīna* にある広場 *rawḍa, rabad* の *khān*、特別のキャンプ地、農園の一部などにも滞在した。都市の叙述は、まず市街の規模・風土・民情や特産について、つぎにモスク *jāmi'*, *masjid, manāra*、学院 *madrasa, zāwiya*、防衛・保安上の施設 *qal'a, burj, sūr, khandaq*、古蹟・墓廟 *ziyāra, turba, mashhad*、道路・地区や市場などであった。これらの都市の叙述は、しばしば、アンダルスやマグリブ地方の諸都市との比較においてなされた。

(3) 政情と国家・支配者の巡礼者に対する処遇

77) マグリブ人の巡礼記リスト nos. 52, 57 を参照 (op. cit., p. 201)。

78) op. cit., pp. 196-197.

79) 例えば、Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa*; Ibn Khayr, *Fihrist*; Muḥammad al-Anṣārī, *Fahrasat al-Raṣṣā'*; Ibn al-Zubayr, *Ṣīlat al-Ṣīla*; Ibn Qunfudh, *al-Wafāyāt*; Ibn al-'Abbār, *al-Takmilat*; Ibn al-Faradī, *Kitāb Ta'riḥ 'Ulamā' al-Andalus*; Ibn Bashkuwal, *al-Ṣīlat*; al-Makkari, *Nafḥ al-Ṭīb*; Abū 'Abd Allāh Muḥammad Dinār, *al-Mu'nis* など。

国家・支配者にとって、遠方より集まる巡礼・旅行者たち、物資の交換取引と文化的宗教的活動は、国家の安定と都市の文化・経済の繁栄を維持するうえからも好ましい現象であった。とくに、異民族支配者が地域統治を正統づけ、知識人や民衆の支援を得るためにも、イスラムの宗教行事を奨励し、敬虔なムスリムとしてこれに積極的に参加することが要求された。マグリブ巡礼者たちにとって、通過地域の国家・支配者の巡礼者に対する態度、往来の制限、関税の徴収、道路の安全管理、護衛、スルタンの発行する通行保証書などに関する情報は、極めて関心が高かった。

(4) 旅の途中の自然地理条件

通過する河川、海、山岳、砂漠、森林などの分布、天候・気象条件、農耕地や遊牧の状態などについては、最少限の記録にとどめられている。農地・果樹園や牧草地の分布を具体的に描写することは稀れで、作物や家畜の種類を挙げることも少ない。

(5) メッカ・メディナにおける巡礼の模様

Ibn Jubayr によるメッカ・メディナの叙述に代表されるように、白衣清浄 *iḥrām* の状態に入ってからカーバ神殿、‘Arafāt, Mīnā での宗教儀礼、数々の建造物、名蹟、周囲の山岳などの名称と由来は、(6)と共に巡礼記の記録・叙述の中心部分を占めている。

(6) 学者・知識人たちと学問修得の活動

先きにも言及したように、マグリブ人による巡礼記 *al-Riḥla* の叙述中心は、筆録者が巡礼の往復路の諸都市において、高名な学者・知識人たちと面識を得たこと、学問修得の具体的内容、弟子・聴講者との交遊、その他教育・思想の傾向などの、言わば学問探求の過程を説明することにあつた。諸学の内容は、とくにコーラン・スンナ諸学、注釈学, *qirāʾ*, 伝承学, 法源学, 法理論, 思弁神学, 言語学(文法・文章・語意), 詩文などに関心もたれ、これらを専門とする評判の学者・教育者やスーフィーの聖賢たちが列挙された。おそ

らく、東方の旅を果たして郷土マグリブ地方に戻った学者・知識人たちには、マグリブ各地は勿論のこと、東方の諸都市における学問経験と知識・情報を報告し記録することが要求されていた、と思われる。従って、巡礼記の執筆によって、その著者は豊かな学問・教育の伝統と新しい知見をもった、優れた学者として、マグリブ知識人の間に指導的地位と名声を得たのである。事実、巡礼記の筆録者たちの多くは、コーラン・伝承学, 言語, 詩文, 神学や法学などの幅広い学問分野に通じた高名な学者として、多くの弟子たちを集めてマグリブ社会・文化に大きな影響力を及ぼした。巡礼記の叙述内容は(1)~(4)に関心が薄く、(5)と(6)、特に(6)の問題に中心が注がれているのは、その筆録の本来の目的に基づく当然の性格であろう。

終りに

最初に指摘した問題に戻るならば、私はイスラム世界の経済的文化的統合性と社会的流動性を形成する重要な要素として、メッカ・メディナ巡礼の機能とその史的役割を捉えようとしている。つまり、巡礼活動を一つの基軸として、イスラム世界は人間・物資と情報などの幅広い交流と融合の諸関係が維持され、その全体が統合的・均質の文化圏——H. R. Gibb の言う〈容易に識別しうる共通のイスラム的刻印〉——に向かって、つねに大きな展開をしつつある⁸⁰⁾、と捉えることが出来よう。これらの動きは、イスラム世界の空間的拡大と時間的経過のなかで増々多様・多元化しようとする逆の潮流との絶えざる抗争と競合関係を持ちながら、両者の動きはさらに複雑な様相を呈した。私は、以上のような複雑に渦巻く潮流を解明していく一つの手がかりとして、マグリブ人によって記録・編述されたメッカ巡礼記 *al-Riḥla* の記載内容に注目した。本稿では、その主要な書目、その内容の概要と性格など、言わば巡礼記の全体像を描

80) ハミルトン・ギブ, 「イスラームの歴史的一考察」, 『イスラーム文明史』, 林武訳, pp. 1-2.

くことだけに留まった。今後、個々の巡礼記の内容と具体的事実に立入って、その史料価値と巡礼をめぐる社会的経済的諸問題を追究していきたいと考えている。

[本稿は、昭和57年度三菱財団研究助成金による成果の一部を為す。]